

奉伺度奉存候得共又御多用中段々妨尊暇候も如何之至奉存不得止先生
に迄御尋申上候間御都合を以御伺置被下候伏奉相願候今日之期に立至
候は決る兩全之策調候事に不奉存候付御合置被下候も萬端可然御配慮
之程奉希上候猶近日拜接可奉鳴謝候以上

七月七日

奈良原幸五郎

岩倉右大臣殿

御家令様

一四七 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月八日

御安全奉賀候然今日評議之次第島津に申入候義參議に有は甚輕々敷相
當り如何と存候拙官義行向候得は宜候得共明朝山縣に篤と不申聞候は
不相濟候に付甚恐入候得共尊公御參掛同家に御尋御談判給候様相成間敷

哉先申試候尤一昨日小生を申入候處にては蕃地處分濟速に退兵可然との
論に候間昨今之評議とは相替り候間此段も御含可給候早々拜具

七月八日

巖 公

二伸 御苦勞相掛候は恐入候得共小生先日來之行掛に少々都合あし
き事情も候間尊公御出給候は、至極安心仕候

一四八 松平慶永書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月九日

謹啓奉り候梅天濛々敷候處先以彌御清泰被爲涉奉慶賀候陳者昨日會館用
向にて島津左府公へ行向候處左府公之話にては近々之内舊縣へ湯治願候
由に御座候方今國家御多事之折柄殊に臺灣一條も世上色々風聞有之候處
萬一舊縣等へ被罷越候様之義
御許允相成候は、都下は不申及國々有志之徒必生沸騰可申哉と實に昨夜

も不眠苦惱罷在候如何之御事候哉被案申候別る左府公は昨年西四辻山岡等態々薩國へ被遣當年も萬里小路等被差遣毎々特別之勅詔も被下候所俄に湯治とは乍申萬一出立候様相成候へは人心離散も可仕哉と存候只々愚昧之私心痛之外無之候左府公之義に就るは昨年來伊達兩人聊心配も仕候事故内々相伺ひ申候尤外に相伺度儀も候間御用繁恐入候得共一兩日之内被仰下候は、直に拜趨心緒申上度奉存候御模様相伺旁一筆奉差上候恐々謹言拜

七月九日

岩倉公閣下

慶 永

一四九 岩倉具視書翰

北白川宮能久親王宛

明治七年七月十三日

益御壯榮夜白御勉學之旨傳承遙賀候天機平穩國內靜謐御休意企望致候小

生依舊奉職乍恐御安慮願候然は今般少佐御拜命且御學資金増加之義に付縷々御謝詞御陳述之趣恐縮之至素り 叡慮に被爲出候事にて小子盡力而已には無之乍去御奉命之段爲公私大慶此事に奉存候尙此上一層御勉勵屈指御成業之日を御待申上候將五月より四ヶ月間實地御修業之爲め陣營御見分之趣拜承且當秋より兵學校に於て御勉學之由恐悅尙爲國家艱苦御審案御勉學之程奉懇願候右勿々概略及報酬度如此候敬具

七月十三日

具 視

北 白 川 宮

一五〇 三條實美書翰

岩倉具視宛

明治七年七月十六日

先刻御書面之趣承候柳原書狀は未到來不仕早速外務省へ可尋遣候島津之儀にて午後二時頃參上可申上候依る御請如此候也

岩倉具視關係文書第六 (明治七年七月)

百六十九

第七月十六日

實美

岩倉殿

一五一 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕

明治七年七月十六日

今日午後參上申上置候得共夕刻出頭可仕候間延引之段申上候草々拜具

七月十六日

實美

岩公

二仲 島津一件に付申上度義に付參上之積りに御座候明朝にても宜候は、御參朝之上申上候も宜候

一五二 岩倉具視書翰

〔柳原前光宛〕

明治七年七月十六日

七月二日附外務省御用信并に三大臣當て尊翰甲乙案あり外に小生へ同一通中新聞紙あり總て篤と拜見致候先以愈御安寧欣然候然は今度清官員御談判之始末實に不容易困難之處百方御盡力遂に兼而御談判通彌臺島出兵は吾義務之當然とし跡取締は支那にて云々等之事北京政府にも合議近々尊卿迄差出候運びに至り候事爲國家恐悅此事に存候且臺島清國之所有と申す義雙方の一言も無之重疊に存候右は前文書取御差廻し之上尊卿甲乙二策之稿案兼用之次第に可至と存候畢竟甲策にて讓地費金申請之事に候委曲は寺島大隈の御答可申入尙又三大臣の返翰并今後之廟議目的之荒増書取に而田邊太一隨身差出候事に候小生同人出會之上諸事申含其上發足心得之處掛け違ひ面會も不致御傳言も不申入頗る残念之事に候依而御内狀御請迄如此候也

追而内密一筆申入候赤松福島は御地へ罷出谷樺山は歸 朝其後之廟議剛柔二端日々集會不一方心配致候併し三名にて御返事申入候通り内決

候貴卿には斯迄御配慮本文之運ひに至り候處費金請求之段に至り定め
る御思慮外御心配と存候へ共リセンドルは勿論米佛御雇法律家等百方
取調爲致候上條理判然なる處を以て爰に至り候尤成否により彼が兵端
を開候に至つては最早不得已必死戦争と内決候實に不容易御大任御胸
中千萬令遙察候其上政府之氣脉通し兼候處も有之候歟と彼是心配致し
候此追書は尊公限り申入候事に付必ず御漏し無之様願入候

七月十六日

具 視

柳原前光殿

一五三 勝安芳書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月十六日

拜展昨日蒙命候津田生之儀段々申込候處何分埒明兼東府知事にも勘辨之
上取計可申旨申遣置候未た何之返答も不申越候得共今日中には相分可申

哉と奉存候否次第可申上心得に御座候誠に何方も彼是申聞埒明兼候には
困却仕候河村儀省内之者を以て出勤も可致申越候間一封差遣候定て出勤
可仕と奉存候省内にても種々情實も有之何事も差支勝而已乍去餘り騒立
も不仕候間先夫を以て是と仕置候事に御座候右御受旁申上候以上

七月十六日

安 房

右 府 公玉座下

一五四 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月十七日

御不例厚御保護專祈候扱御内談申候一件黒田次官相招内話仕候處同人義
も深心配仕候上此節は不得止次第却る願之通御暇之方上策と申居候猶委
細は拜上可申上候得共前段一筆申上候也

七月十七日

二伸 下官も今日申上候通此上は致方無之と存候猶御熟慮奉願候

實美

岩公

一五五 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治七年七月十七日

過日御細書にて津田士之事云々來示御内情御尤に存候小生にも信義上に於て決して等閑すへきにあらず何分勝氏引請に付尋問候へば暫時隙取候迄にて心配可致被申居候事故來翰後一昨日昨日等文通成否判然速に御報被下度申入候所今日態々入來於東京府九等出仕として登庸致し度大久保一翁申談しの趣候夫を以同府官員一人轉任之事内々依頼に候依て早々右運び可相附候得共少々隙取候事と存候委細は面上可申入候得とも不取敢一筆如此候小生には兼々見込の通り勝斷の上は早々陸軍省の方心配覺悟の所右行懸りの次第に候且過日來時邪平臥今兩三日は逆も出仕致し兼候

扱又當人過日入來候得ども差支其内此方より閑日可申入答置其儘等閑に相成居候何も宜御合置可給候早々以上

七月十七日

具視

佐々木殿

一五六 佐々木高行書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月十七日

尊翰下賜難有奉拜見候少々御所勞之御旨俄に暑氣甚敷相成候間別々爲國家御加養奉祈候陳者津田生之義に付縷々御示諭近日殊之外御多事殊に一方ならず御配慮〔不分明〕段々御尊慮被爲懸候段私に於ても深く難有奉存候實は同人かもさのみ差迫る譯は無之筈に候得共兼々申上候通之情實に而一日々々と故なく滞在之處に而は不都合之段申出候事に御座候間御尊諭之旨は私分密々可申聞候間左様御聞置被仰付度孰れ拜館萬縷御禮可申

上候將又過日申上置候舊縣非役士官山地北村初三四名にも過日來屢出會
谷干城兩人に亦段々心配仕置候次第も御座候間參殿可申上相心得居候得
共何分御多忙恐察一兩日差扣申候御順快之上は參殿夫是之事情可申上候
只今追て官途に登ると申運にも至り兼候得共前體之都合は宜敷候間左様
御安神被仰付度候先は右耳勿々御受申上候也頓首敬白

七月十七日

高行

岩公

一五七 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年七月十八日

御安全奉賀候御不例如何御保養專祈候昨日御内談島津一件尊公より御返
答振御決定御申入相成候は、一寸御意願上候草々要用而已如此候也

七月十八日

實美

岩倉公

一五八 岩倉具視書翰

〔佐々木高行宛〕 明治七年七月十八日

今朝來翰忝候津田士姓名年齢何縣貫屬是迄何勤仕とか申事一筆にてもよ
ろしく早々書取廻し候様との事に候間足下一寸書取此者へ御渡し可給候
又は今夕にてもよろしく候早々以上

七月十八日

具視

佐々木殿

追て一翁より申越候事は今朝大禮服の事何も承候也

一五九 中山忠能書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年七月廿一日

彌御安全奉賀候誠昨日は御面働深く恐入存候御内話共拜承候扱又今日三時過左亭へ行向候嵯峨松平池田松浦同席段々申談候得共何分無用之身に候間所勞療養の爲め住馴候土地に遊歩等も致度由再三被申述候去ながら先文同席一同所存段々申述候處猶得と被勘考候趣仍此段先申上置候今日の處行向候詮も無之赤面候へとも無致方各引取申候委細は拜上可申上候也

七月廿一日

忠能

岩倉明公

返々所勞氣押出仕□□短札可蒙御免候也尤御用等被仰付義に候は、少も勝手は不申立□候へとも何も無用の身に候間休暇中旁行向度との確論に候也

一六〇 三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年七月廿二日

御安全奉賀候然は下官義昨日來風邪熱氣有之何分今日仕勤難仕不參候扱島津之一條彌御同前面談如何哉と下拙も今日は引入候得共明日は大抵宜と存候御同伴仕候も宜候仍此段得貴意候也

七月廿二日

實美

岩公

一六一 岩倉具視書翰「佐々木高行宛」明治七年七月廿三日

昨日谷士出帆に付出會の砌かねて内話山路北村云々足下委細申入置候に付尙承り吳候との事に候明朝八時比來臨候は、忝存候津田士昨日當り東京府出仕の由八九等の内なり勝より承り候如何に候哉御承知候は、御一筆可給候

かねて及御内談候御配慮被下候北畠へ御咄し一人の事如何に候哉御世話

役申入候得共様子承知致し度候尤御採用六ヶ敷候はゞ無御遠慮其旨御示し可給候
右早々如此候也

七月廿三日

佐々木高行殿

具 視

一六二 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年七月廿四日

御安全奉賀候然は山縣陸軍卿一昨日は事務局に出頭無之趣に付今日はお仕之事爲念申遣し置候病氣に無之は必らず出仕被致と存候同人儀事務局に隔日出仕之事本省關係候事としては隔日に不能出とも御用之節出頭候も宜哉に申居充分得意にも無之候得共是非出頭之様申含置候情實も候間出頭之上は都合宜當人も勉勵候様有之度今日出仕候は、初日之事故大隈

川村等三人之都合熟成不仕るは如何と懸念に存候間何卒御含好都合に至り候様御盡力所望に御座候病中不能出仕聊懸念之餘内密言上候仍早々如此候

七月廿四日

實 美

岩 倉 殿

今日は 臨御之日に候處不參別る恐入候何分奉願候也

一六三 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年七月廿四日

別紙黒田開拓次官建言御廻申候建言中魯西亞關係之事件有之候に付世間に流布魯國に傳聞相成候は交接上不可然と存候間他に不洩様注意肝要と存候別紙は大久保にも承知と存候得共御廻被下候右懸念之事も屹度なく御申含黒田次官へも同人より不悪申傳候様御談希度候依り内々得貴意

候也

七月廿四日

實美

岩倉殿

二白 尊公へも別に差出し候は、御別紙は御返却可被成候

一六四 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月廿六日

要用略札高免大久保清國行之義は決る不可然御止之外無之歎然處大久保性質御承知之通故御爲と見込候事は確乎不可動處有之候間自然御採用無之節引入候様にては頗不容易候間御互に篤く説諭無之は一朝一夕に相止候事無覺東存候就るは黒田開拓次官に内々御謀り同人よりも周旋有之候ては如何や小生此一事實に御大事と存候甚苦慮に不堪候猶篤御勘考有之度前以愚存之所も御參考奉願候憂慮之餘此段申上度如此候也

七月廿六日

實美

岩倉殿極秘

一六五 岩倉具視書翰〔島津久光宛〕 明治七年七月廿六日

昨年 勅に依て御上京之末内閣顧問御拜任之處今春に至り佐賀縣貫屬暴動非常之變故たるを以て御老體も御厭無之斷然御決意山海御跋涉爲國家御勉勵之次第素々深く感佩繼て左府御拜命に相成り候に付ては益爲天下御盡力可有之義と一向希望罷在候處一事件云々殊に事未定中病を以て御籠居更に御出仕無之義は如何之賢慮候哉不得其意加之頃日來征蕃一條に付内外紛紜不一方時機に候得は速に御出仕可有之と存候處其儀も無之實に遺憾此事にて於具視は頗る失望之至りに候乍去於御情實は又不得已形行御推察申入候に付彼是愚慮在之湯治御内話之義も御答不申入數日空敷

遷延何共申譯無之候其上今日に至り候ては勘考之次第も晝餅に屬し如何
んとも致方無之附ては休暇中湯治御出願之義は可任尊意筈に候得共決して
不可然と存候如何となれば前文にも申入候通屢 勅使差下され厚く御待
遇遂に重職被任候上は自ら御擔任は勿論殊に臺灣御處分に付ては公御奉
職否や是迄之行懸り不得已條件御熟知之上出師を果たし爾後和清之間覺
隙を開き候も難計今日之景況實に國家之重事たるは言を待す凡て本末輕
重權衡之御職掌一日も 輦轂之下を離去なされ候は情也理也兩つなから
欠るに似たり況んや百里外に於てをや右等之處幾重にも御賢考在之爲天
下速に御出仕御勉勵之程更に切望致候義に御座候事

七月

具 視

左 大 臣 殿

追て湯治御出願之上如何之 御沙汰に可相成哉右等は元々承知不仕且

又條公意見は御直談之事と存候只一分見込而已申入候事に候以上

一六六 三條實美書翰

岩倉具視宛 明治七年七月廿七日

苦慮に不堪一筆拜啓候過刻大久保に談之一件明日は是非決定之様無之而
は一日一日と遷延候而は實に大事を誤るに可至と存候今日之急務海陸全
權之人御委任肝要と存候大隈建議之件々も政府之處置と海陸之事務と區
別相立速に相運候様無之而は不都合と存候大隈より右之件々伺書に致候
は權外の事に不都合のみならず海陸不平を鳴し候根源と被存候何卒右
は御互之氣附に致し御評議相成候方都合宜歟と存候猶大久保之返事は明
朝催促致し兎に角速に軍事緒に就候様實に燒眉之急務と存候也

七月廿七日

實 美

岩 公

一六七 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年七月三十一日

御安全奉賀候過刻島津に行向談候處更に異議無之同意に御座候猶唯今大久保入來黒田伊地知等談論候處黒田も餘程當惑之趣に候得共支那結局相付候迄は御請可致との由併無據開拓使用向にて十日計函館に參り度由に承候伊地知も承服御請可申との事に候兩人共明日明後日之中に御達有之度申居候仍要用而已如此候也

七月卅一日

岩 公

實 美

一六八 伊藤博文書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月一日

山縣陸軍卿參議拜命之儀御指揮適當人へ相傳候處既に上陳仕居候軍務御

委任之儀公然被御達之上は更に異議無之御請可申上候又軍資之儀も今日御内決御座候次第申聞候處異見無之尤當人兼る書面を以見込申居候充備之儀は大體之論に即時御施行と申主意には無御座候間御汲量被下候様奉仰候大久保卿明朝同氏へ面晤之筈に付尙同卿よりも御聞取奉願上候勿々頓首再拜

八月一日

伊 藤 博 文

右大臣公閣下

一六九 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月四日

略札高免

黒田北海道行之事伊藤頻りに相止め申候昨日御説諭之趣拜承如何哉何卒速に當人に御説得相止り候様致度候大久保は説諭之情實も可有之と存候

得共北海道之事は燒眉之急にも有之間敷候間是非見合相成度事に存候何分にも宜御勘考奉仰候草々如此候也

八月四日

巖倉殿

實美

一七〇 岩倉具視書翰〔柳原前光宛〕 明治七年八月五日

肅啓皇上益御機嫌克被爲涉恐悅此事に存候足下御安泰欣然誠に此度は大困難事件之談判殊更御引受之處終始確然御貫通實以感服致候尙此上御盡力之程爲國家是祈候

一 藩爵御談判都合克相運候處違約のみならず西郷直談等總而齟齬狡黠之所業折角御盡力之廉も水泡に屬するか如く遺憾此事に存候乍去蕃地處分は我義舉たる云々は抔は屹度爲證事判然大著目之一端誠に可喜之事

に候

一 甲乙二策之御建言又は成局兩道之方略及始終之御談判振等巨細御示し百端厚く御注意之程致感佩候致而は政府に於ても屢御評議之末所詮事理筆頭に難盡候に付田邊太一被差立縷々申入候通り之事に候上海より天津へ御著到李鴻章御談判之次第是亦御細示承り申候爾後於北京應接如何果して皇帝謁見を許可するや否是則ち事之成敗兩別之境と可相成候此際御焦思之程想像旦夕屈指吉報相待申候

一 此度廟議被盡候上大久保卿辨理大臣として被發遣候右は中外新聞中に八九は支那政府戦争に決議之趣且藩爵之反覆不可計之底意も相顯れ萬一甘言を以て我を誑し而て彼竊に海陸軍を整頓し我を討撃する之策を可相運哉も不可知候彌和戰相決候場合に立至候は、我より急攻猛撃するを以て上策と爲し萬事御委任之上派出之事に候尤御出會之上は何も御承知之事と存候得共尙大略御趣意申入候一層御奮起大久保卿と共に

々御盡力之程彌以致希望候

一毎度御投簡一々御報不申入殊に海外御出張不容易御苦慮に對し候も
萬々不本意汗顔之至に候全く機務鞅掌之爲總事務局に任せ意外失禮
御海容を乞ふ却説公翰御投寄之節大臣外務卿御名宛に有之候得共爾來
は事務局長官之名も御差加相成候方都合宜く候
右一筆申入度艸々如斯候也

八月五日

具 視

柳原全權公使殿

一七一 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月八日

別紙大隈の相廻り候間入御傳聞候篤御評議無之は如何可有之哉此際米
國と爭論を開き候は甚不可然事と苦慮仕候草々拜具

八月八日

實 美

岩 公

一七二 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月十二日

別紙黒田の申越し候間入御内覽候山縣には今朝下官面談可仕候昨夜大久
保の電信有之候得共文字相分り兼候に付早速大隈へ相廻し候間自分御承
知可相成と存候支那之形勢別條無之由に御座候早々拜具

八月十二日

實 美

岩 倉 公

(別紙)

拜啓

川村大輔ハ伺出シ一條は是非明日中御決議有之様當人歎願に付餘程都合も有之由に付山縣卿へ御下問先可成朝之間に被爲濟至急御沙汰相成候様下官ハも奉懇願候謹言

八月十二日

黒田拜

三條公閣下

一七三 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月十四日

別紙伊藤ハ内史へ命草案差出候入御覽候支那關係之事掲載有之候得共彼山縣建議ニ如き御示諭も無之ハは地方官ニ心得も可有之歟今少し別紙十分にも不被存候得共先以御廻し申候明朝御持參奉願候勿々拜具

八月十四日

實美

岩倉公

一七四 伊藤博文書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月十六日

昨日御渡御座候遣外國公使領事等へ御示相成可申書案一覽仕候處本書も御草按も文意甚不穩様奉存候

外務省ハ遣外ニ使臣へ致書通候公書は事相濟候上は出版して内外人民に爲見候ハも不苦ものに御座候左すれは唯事實に有之候事而已を書認可致要用然るに彼は詐僞又は首鼠兩端或は誑凌百端其他數語醜態最甚し又彼の密謀を看破したる如く無證據の事柄を書揃無益ニ偏論は公務上の書信體を失候様覺申候唯々兩國政府之間に事實有之候書信と形勢丈けを御示相成候方可然様奉存候不憚忌諱愚言上頓首拜具

八月十六日

再白 山縣上書は一覽仕候に付返上仕候

伊藤博文

巖相公閣下

（參考）臺灣蕃地處分の儀に付趣意書

明治四年十月十八日琉球古島八重山島人民の船四艘那覇港出帆十一月朔日風に遇て漂流數日遂に同月六日臺灣蕃地に漂到す陸に上る者六十六人而て生蕃人の爲に慘毒の殘害を蒙り纔に生命を全して逃れ歸るを得る者十二名其他五十四名は悉く暴殺せらる尋て六年三月八日備中國淺江郡柏島村人民四名又臺灣蕃地に漂到し亦蕃人の爲に衣服財物を掠奪剝取せらる之か爲に琉球蕃王其狀を具し小田縣令其情を奏す爰に生蕃問罪の議起り乃ち當時外務大臣副島種臣を清國に派遣の砌渡蕃處分の事を談判せしむ六月廿一日北京總理各國事務衙門に於て毛氏董氏の兩大臣共に總理各國事務大臣なり答ふる所あり曰く生蕃の暴惡なるは彼實に化外の民なり我政教の逮及せ

ざる處なりと嗚呼臺蕃の凶暴慘虐既に如此古來萬國目して食人の國と爲す又宜へなり是國中の陷穽人々得て之を除くを得る者なり而して接壤の清國久しく坐視傍觀其自恣に任かす今我國棄て問はずんは宇宙萬民の後患極り無からん況んや我從民の既に其毒手に陥りしあるに於ておや因て直ちに罪を鳴らし其心を攻んとす然して蕃地は支那の領地と犬牙錯綜せるあれば一旦事あるに方つて或は皇清兩國の鄰誼に碍りあらんを恐れ宜しく事重きに從ひ我此一舉を豫しめ其地方官に宣告せしめて后蕃地に入らしむへしと恰かも本年三月西埗の亂平らき生蕃問罪の廟議遂に一決し陸軍中將西郷從道を以蕃地事務都督に任し四月五日別紙第一號の勅書特諭を賜ふ西郷則護身の兵を携へ船艦五艘を發し五月廿二日臺灣島の西南にある生蕃地社寮に達す偶々我兵牡丹蕃地石門口に至る者あり二次蕃人の爲めに狙撃せられ死傷數人故を以て將卒憤を發し爲に報復し牡丹社を撃ち頭人父子を斃す十八社の會長來り降るもの相踵き兇良勦撫營を龜

山に設く是より先き柳原前光全權公使に任せられ北京に派遣の命を蒙り四月八日を以て勅書を同人に賜ふ其略に云く今膺懲を行ふ意は野蠻を懲らし良民を安するに在り敢て罅隙を隣國に開くに非ざる也と前光勅を奉し五月十九日東京を發し清國に航行し上海に滞在す此際引違へに總理衙門より我外務卿に照會する文書到來せり其大旨は則ち往年副島大臣在清の時臺灣地方の事件は日本政府より祇に人を遣し彼地に告知し兩國は好意を以て相待つべき等の意にて兵を用ふる等の語は更に無之兩國所屬の邦土不可侵越を約せり然るに日本今兵を蕃地に送りし說北京在留の各國公使之を報し諸新聞紙之を掲載す此事若し實ならば何迨清國政府へ御報知無之乎之段申越たり然れとも此際既に柳原公使出發後なる故右書面の旨趣に付ては柳原より可相答とのみ返翰差贈れり其後福建總督李鶴年より西郷へ書を復し蕃地は清國の所轄中也等の說を唱へ我に兵を撤せん事を乞ふ此書の旨趣既に副島大臣の聞く處と同しからす又當年總理衙門來

書之意と符合せず其不都合又甚し然るに柳原公使は上海に於て清國幫辦大臣潘爵と談判を始め事務決定を約せんと擬せし其仔細は別紙第二號に詳なり然るに六月廿二日及び廿五日潘爵渡蕃柳原との約に叛き直に西郷都督に迫り諸般應接に及び七月八日潘爵福建より上海にある沈秉成を以て柳原公使に照會書差越し且沈秉成應接及公使より爵へ覆照する文書俱に第三號に掲ぐ夫れ問罪着手の順序と清國關係の次第は前號中に明瞭たり潘爵先きに柳原と約し央に西郷と談し後に柳原に答ふ皆矛盾齟齬誑凌百端輕侮既に甚し是れ彼内に戰心を含畜し敢て驕氣を抱藏す故に其物色の外に顯るものか而して唯姑らく恭恨相交え我をして其真意の在る所を疑はしむるものは他なし彼兵備未だ整はず急發敗衄の憂を慮かり我鋒を紆んとするのみ近日漢洋新聞紙中清國兵備を修整する等の事往々露出す況や又第四號軍機大臣の密書を福建に寄せて不虞に備へ又其船政大臣沈葆楨は上書して鐵艦を購買し豫防をなさんとの件を乞ふ是大に予を抵防

するの意以て見るへし於是七月九日廟議一決し陸海兩軍へ密諭を下せり
若し彼より端を啓き予に抗するの日防護の策なかるへけんや因る緩急不
虞の備を設け方略を籌畫せしむ因て外務省四等出仕田邊太一を派して廟
議の決する所及び清國總理衙門へ談判要領等の文書を具して柳原公使に
達せしむ即ち別紙第五號に詳らかなり既に斯の如しと雖も廟議尙ほ柳原
公使は生蕃事務に付獨斷の全權御委任無之因て或は談判の遷延せん事を
慮かり更に參議兼内務卿大久保利通を以全權辦理大臣に任し清國派遣の
命あり委任の條件載せて別紙第六號に在り本月六日發航直ちに北京政府
に談判し其決定を期せしむ且本月二日再び陸海軍卿輔に内旨を下さる是
他なし我國獨立の體裁を維持し侮を外邦に禦くの主旨のため止を得ざる
に出るものなり

外務卿

遣外公使領事宛

七年八月十二日

大臣

蕃地事務局

參議

外務省へ御達按

今般臺灣蕃地處分之儀に付ては外國政府及人民を往々我遣外公使領事等
へ開合候儀も可有之候處返答候様區々相成候は不可然に付別紙趣旨書
之通外務卿を公使領事等へ通達相成候方と存候御達按相添此段奉伺候也
外務省へ御達按

臺灣蕃地處分之儀に付別紙趣旨書之通相認其省より遣外公使領事等へ可
相達事

一七五 大木喬任書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月十七日

尊簡之趣奉拜誦候今日御評議有之候獄屋之一件盡力可仕候様難有奉存候早速法方取調兩三日を不出奉伺候

副島種臣へは小官昨日罷出緩々談話仕候同人にも當時格別用心謹慎之模様に見受申候江藤島御處分之事丈は承知に罷在候得共重松福地副島謙助等之事は承知不被罷在小臣談話中聞毎に驚然被致候尤右は皆以同人親類之義に候へは彼是と痛心被致候義に御座候小臣を以て勘考仕候處當時決而別心は不被在之同人之性質を推論仕候へば固り忠義名分は十分擔當認體被致人物に候得共先々來之事は全く勢に乘し候些少之不平心に粗略之混淆し而内地旅行等之事逼迫被申出候事と相見申候此義當時全く思止り被居候にも無之候得共強而被申出義にも無之今少しなやし候は、折合相付可申奉存候小臣にも十分之目的相立居候間御引受可申上奉存候過日

閣下御逢をも被遊候て御内心も有之趣に拜承仕居一度御逢をも被下候は、難有仕合と奉存候萬端明日にも拜謁可申述先御含まで奉申上候再拜頓首

八月十七日

大木喬任

岩倉公閣下

煩覽親

一七六 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿三日

御安全奉賀候御所勞如何御保養專祈候御内御病人被爲在候由御配慮奉察候扱今午後中山嵯峨伊達池田兄弟松浦立花大原等來集相成國事に付建言有之承候定而尊館へも參上と存候へとも委細御聽取之事と不警候實は小生何事か不相辨左府の掛合に付面會仕候處不圖同席に而左府より從來之

不平論相發し中山始列席之處に於同僚と議論致候は不體裁と相考候に付左府之論は猶別に談合可仕と申取止申候得共彼是激論も有之頗不體裁に於困却仕候加之左府見込御採用無之事抔左府之面前に於拙者に被相尋返答甚困却仕候左府之情實は伊達抔は能々承知之事然るに今日之如き事有之候は折角出勤相成候左府も又引入に相成候様可至實に困却仕候中山始も注意無之は却る左府之進退に妨出來候哉と誠困入候猶拜上可申述先内々申入置候不具

八月廿三日

岩倉殿

實美

一七七 島津久光書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿三日

只今中山一位殿初拙宅に來臨大臣中の申出度趣有之に付明廿三日朝七時

頃三條殿に致集會候様承申候尊公にも御來會有之度趣に承申候仍る御所勞御勉強是非御來會被下候様於下官も奉懇願候

八月廿三日

久光

岩公

一七八 柳原前光書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿三日

左府公の御來簡に付御内問之件々致承知候巨細は如何難測候得共中山一位初建白趣意は内外切迫國計不足等の着眼候由傳聞仕候其起源は中山忠左衛門といふ説あり過日小生にも相勸候者有之候得共理り致置候

八月廿三日

前光

岩公

一七九 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿四日

別紙唯今大原池田入來被示候に付即御傳覽に入候於拙者は一讀愕然其旨趣頗其意を得不申不服に存候尤一々辨駁仕候積りに有之候得共先日來左府との間扞格之情實も有之候に付私論に相涉り候亦は如何と存候間何卒尊公深御配慮を企望仕候事に候如此事に亦は會館歴々之人にも爲朝廷如何と歎息之次第に御座候慷慨之餘り言激烈に相涉候得共不惡御諒察奉願候

八月廿四日

岩倉殿

實美

一八〇 中山忠能等建白書〔三條實美・岩倉具視宛〕 明治七年八月廿四日

前日書を閣下に呈し聊管見を陳す海量より其言を容る欣拊の至に勝へす因て再陳せんと欲する所の者あり以爲く前の言ふ所の者業已に之を容る後の言ふ所の者豈聞かれざる事あらんや謹て啓申す閣下夫れを擇へ前年島津左大臣方今政體に就て着眼の要件を論列す 朝議措て用ひざる事累月其後他事に當り再論する所あり而して議協はす遂に病と稱し 朝せざるに至る夫れ同氏は夙に朝野の望を負ひ又曾て天下に大功德あり故に其舊里にあるや數々 勅使を賜ひ以て其病を問ひ且之を召し到らしむ其入京するや内閣顧問に充て尋て左大臣に擢任す其之を待遇せらる亦厚しと云へし而して其任用に至つては何そ甚輕き夫れ其官を重くするは深く其責に任せしむる所以なり今既に鼎職に任し而して其言論する所の如きは措て問はず左大臣の名ありて左大臣の實を行ふ事能わさらしむ豈病と稱せざるを得んや且衆庶皆々尊嚴を冒す伏乞幸に宥恕せよ不宣

從五位 松平信正

明治七年八月廿四日

從五位	松平忠和
從五位	津輕承叙
從四位	立花鑑寬
正四位	松浦詮
同	大原重實
從三位	佐竹義堯
同	龜井茲監
從二位	池田慶德
同	伊達宗城
同	大原重德
同	嵯峨實愛
正二位	松平慶永
從一位	中山忠能

太政大臣三條實美殿
右大臣岩倉具視殿

一八一 岩倉具視書翰

〔松平慶永宛〕 明治七年八月廿四日

其後は御無音候彌御安全珍重存候扱先達而來段々御配慮御示談有之候島津之事別段思食被爲在御直に御沙汰被爲在候末速に出仕有之殊に日々勉強三條小生等にも實に安心且天下幸此事に存候尤中嵯兩卿は何も御承知と存候得共任序一筆申入候亦臺灣事件の清政府談判行懸り之次第等御承知被成候旨云々會館中御申立御旨趣御當然深く令感佩候兩三日中必ず可及御答候先日は御尋美菓御惠贈忝候此輕品任到來御禮迄進呈候早々以上

八 廿四

具 視

春 嶽 殿

一八二 嵯峨實愛書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿四日

降書跪拜展先以愈御清勝奉賀上候昨夕は參拜區々衷情申上僭越恐惶之處御寛大不被責不敬却る尊慮之御蘊底被示聞奉感佩候猶又唯今御細翰之趣重疊奉拜謝候就ては一兩日中山僕御寛談可被下實に幸甚之至庶幾之事に御座候尊命次第拜趨可仕候御別紙内々拜見是又畏入候萬拜上可申伺候先御請耳言上如此御座候勿々頓首肅復

八月廿四日

尙々今朝參 内於 御前愚衷共言上仕候處至極尤之儀に被 聞食猶御 勘考可被在旨蒙 勅答感銘仕候兩公にも御出席被下重疊難有奉存候昨日も申上置候通り此儀は追々御盡力之事幾重にも奉懇願候是又拜時萬可申上候任序右啓上仕置候也

三白御病人如何御厚配奉察候折角御看養專要存候別段不相伺不本意

之事に御座候

密々御請

實 愛

右大臣公閣下

肅復

一八三 岩倉具視書翰〔三條實美宛〕 明治七年八月廿五日

別紙木戸御暇追願之義過日御内談之通り可然歟尙島久へも御談宜敷相願候

別紙岡山縣士族日置某建言御指令之儀過日御勘考之通り可然歟如此類陸軍省にも一應御打合せ置候否は如何
別紙陸軍省休暇之儀に付伺庶務課見込之通り出師之故を以て一般被差止候否は如何

但九月十日迄僅かの時間に候得共元來征臺に付るは休暇を賜候は如何

之處陸軍省伺旁御勘考相願候

別紙開拓大判官等以下獻金之儀檢印は仕置候得共伊地知黒田申出之儀も有之候に付御沙汰振り厚御評議有之度存候

別紙驛遞寮伺土藏三棟云々申立候處非常節儉之譯を以御許可無之儀尤當然に候得共他事と違ひ候筋に付三棟之處は減少候得共土藏無之ゝは不相叶哉と存候

今日不參に付右條件心附候儘申入候間宜敷御勘考相願候也

八月廿五日

具 視

三 條 殿

別紙五冊に候也

一八四 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿六日

魯西亞公使と御應接之書附島津より御廻し慥に落掌跡より御返上可致候早速寺島外務卿に掛合置候依此段申上候也

八月廿六日

實 美

岩 倉 殿

一八五 岩倉具視書翰〔三條實美・島津久光宛〕 明治七年八月廿六日

今朝は御苦勞に存候借只今魯公使入來出會用事相濟候後〔用事は來る廿九日彼館に於て午食招きと云のみなり〕 彼

近頃失禮之義に候得共御免被下候義に候は、御國の爲め少々御心添へ申上度如何御聞被下候哉

我

何かは不存候得共御心添との義に候は、忝く可承候

彼

箱館李國領事一件誠に御氣之毒なる事出來候李政府人民共隨分議論可有之哉に存候右に付は貴政府御仕向之都合にて大に得失可有之候其義は、天皇陛下李公使若被爲召、勅語を以る意外之義出來云々李帝はよろしくと有之候得は可然存候其上右之御次第々々各國公使は、も御文通候は、重疊と相考候若右御處置御六ヶ敷候は、皇帝奉仕官人より、御沙汰之趣以書中李公使に御示し相成度候

我

一通り及挨拶尙勘考可致答ふ

彼

右之外に此件始末新聞紙に御出し可然右は片時も速なる方御爲めに宜

敷候

我

其義は從疾心配致し新聞紙上にて無之諸府縣偏く布告可致候併し箱館官員も今一段實地之次第申越候上之心得に候

彼

左様隙取候は何の所詮も無之吳々も速なる方可然候右は今にも何人か如何之新聞を出し候後に相成候節は眞に無益に候に於て魯國云々之事あり譬言にて所謂六日尤御布告は至極可然存候

我

今度出張官員往復を相待候には決る無之在官員も昨今は書通可有之筈に付多分兩日之中可布令と存候

彼

夫丈之御事に候得は可然存候全體私義日本公使奉命之節我帝より兩國

問之義は申迄も無之交際上之事に付聊之事たりとも出来候砌は精々平
穩心配可致内命有之候に付如此失禮を不願申入候得共是は閣下限御腹
臆決る御他言無之様願候密々無之候は御互に甚差支候

我

厚く挨拶

右之通りにも畢る

借兼る伊藤黒田心配も有之候處既に魯公使内々忠告御座候上は兩三日中
皇居に被 召兼る御内評之通り御沙汰可然存候又總布告之義も明日は是
非發し候様有之度存候前條御兩公御同意之上は此書狀之儘御廻し寺島意
見御聞願入候小子今日李公使館可行向存候處彼れ差支申候に付明朝十時
半行向候間明早朝迄に御答願入候其上皇居にも參入仔細可申上候仍る早
々如此候也

八月廿六日

具 視

三條太政大臣殿

島津左大臣殿

一八六 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿七日

御安全奉賀候然は中山始建言之義に付御談申度候間明朝九字左府同伴參
館仕度御差支有無御示有之度猶別冊之義も其節御談申度候聞書類上置申
候草々拜具

八月廿七日

實 美

岩 倉 殿

一八七 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿七日

今朝御書拜承候魯公使忠告之事は誠に幸甚候事に御座候過日來御配慮之處外務卿議論有之空しく打過遺憾に候乍併魯公使忠告により其御運に相成候は、魯公使は相悅候事と存候間又一々御都合と存候
華族建言之事猶委曲拜承仕度候此儀僕甚不感心華族之事務に迂濶如此事に亦は更に失望之至り此論を以る久光卿に相迫り候様之事有之亦は甚不可然事と浩歎々々

久光卿外國人接待甚可然僕頃日來心付居尊公へ可申上と存居候處に御座候僕考には至急接遇可然存候實は函館暴舉の如きも攘夷家之取行外國人之傍觀に亦は疑ふ所無にもあらずと存候仍亦各國人之意表に出て英字米佛等之公使左府之面語を請られ候程に有之度左候は、大に釋然する所可有之と存候事に候都合可然御勘考至急之方宜と愚考仕候
今朝は御苦勞奉存候色々評議之件有之候間御遅候共是非御參 朝奉祈望

候草々拜具

八月廿七日

實美

岩公

一八八 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月廿九日

御安全奉賀候然河村入來ブラジル甲鐵艦手に入候都合に付是非御買入相成度申出候に付猶尊公へも罷出可申上候様申置候間定而御承知と存候實に右之艦手に入候事天之賜ものと國家之爲幸甚此上なくと存候此上は入費之出方さへ相整候は、外に差支は無之大隈承諾にさへ相成候は、宜是非大隈にも憤發心配致候様被仰付度存候就亦は尊公明日御不參候は、早朝大隈被召寄御説得相願度小生は參朝之上同人へ是非盡力致候様申聞候合に御座候尊慮如何不存候得共□□是程 皇國之幸は無之と存候此艦

手に入候は、清國不足恐と存候御互是非憤發致候事當然と存候仍右申上度草々如此候也

八月廿九日

二伸 今日は御草臥と存候

實美

巖公

追々明日は是非決定有之度申居候間用途之都合次第大隈承知に候は、尊公御不參に亦も決定仕候

一八九 海江田信義書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年八月三十日

雲翰拜見仕候處昨朝御内談之事件即家令共へ篤と談置候必す近々之中相招き候様取計可申候櫻田屋敷も敷付さへ取かへ候は、隨分手廣に御座候亦差支不申事と相考申候諸事上野へ相頼可申様被仰聞承知仕申候兩日に

致し候とも一度に相招き候とも其邊如何とも都合出來可申上候段々御心添被成下別々難有奉存候尙又參殿細々可申上候御請迄早々如此御座候頓首

八月三十日

二白 珍彦儀は武官之方可然と奉存候未左府殿へは申出候事に無之候間其前に黒田川村仁禮邊より左府殿落着被致候様取計相成度相希申候將又奈良原儀は矢張海軍文武相兼候様被仰付候は、御都合宜敷事と奉存候其邊尙明朝迄之内に參上細々可伺候再白

海江田信義

具視公閣下

御請

一九〇 岩倉具視書翰〔伊藤博文宛〕 明治七年九月二日

岩倉具視關係文書第六 (明治七年九月)

二百十九

過日御内談申入候後少々評議之次第有之折角御見込に候得共一省々々政府に云々省略之事先見合各兼御沙汰之通り各長官の一應申出候上可然と内決候委細御面上可申入候

一募兵の事何とか不相成候は決る不可救勢ひに立至り可申哉と苦慮尙厚く御評議有之度實に懸念此事に候此義昨日條公山縣に示談之處六ヶ敷候

一若し只今にも戦争と決し候砌は米穀必沸騰可致且軍用も如何計御手當可有之哉民心も亦如何と懸念候條是等早く預備無之は不叶事と存候尤大隈方略可有之候得共久々不參に付一應御出會被下御談じ有之度候一過日御内談地方官云々内達速に歸縣之事專用と存候募兵之事に付吳々懸念候且又御説之通り各鎮臺却る増兵嚴重備へ有之度候

右件々厚く御賢考有之度存候處小生今日は正忌に付無據不參致候只今にも破談一報候へは衆庶狼狽極り候事に存候吳々米穀之事抔能々御談じ有

之度候早々以上

九月二日

具 視

伊 藤 どの

一九一 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年九月七日

過刻御紙面御尤に存候小生も甚當感仕候愚存何卒黒田盡力大久保に代り周旋致吳候は、伊藤も不得止承服可仕歟此節大久保清行に付は段々申談候續も有之唯今參議免職と申は久保に對し如何黒田伊地知等にも決る居合申間敷去迎條約之事差迫候次第不得止事に付其邊篤と懇談相成候は、若くは承服可仕歟と被存候御互より最早説得は無益之骨折と存候明日拜上御談可申候得共愚存一筆申上置候艸々不具

九月七日

巖 公

實 美

一九二 寺島宗則書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年九月九日

莊讀仕候昨日終日獨逸人之犯者處分に付奔走致し暮々歸家仕候亦不能拜
酬僕儀今朝十時より出省伊太里公使へ應接有之是又急に謁見相願候由併
魯は明後日に切迫候事に付今朝上野少輔御呼寄に相成アトミラル觀見之
前例に従ひ魯公使誘引可致尤兩少輔之内も附添可致事に候其外言上振等
夫々急に都合可取計旨御達有之度僕には田崎處分に付甚難事申出困入申
候是も何れ爲伺可申候得共右拜答申上候以上

九月九日

宗 則

右 大 臣 殿拜復

一九三 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年九月十二日

過刻御紙面拜承仕候國憲之事は奉命之由答承申候
西郷之事は何れ開戦相成御召に相成候節は是迄之次第詳悉御示可有之候
事木戸之處は子細も有之間敷ながら西郷之處は當人計拜承仕居候譯にも
不相成必らず同志之者へも相通し可申左候節は彼是沸騰も無之哉甚懸念
之由猶勘考之上返答可致との事に候間昨日は其分にも引取候事に候右概
略御答申上候也

九月十二日

實 美

巖 公

一九四 海江田信義口上書

〔岩倉具視宛〕 明治七年九月十六日

信義

一 昨年冬奈良縣知事免職被仰付歸縣仕候夫より從二位久光へ關係の續きに相成去月久光同舟上京仕候右に付是迄之云々且愚意言上仕度奉存候間何卒御都合を以拜謁被 仰付被下度奉伏願候頓首百拜

九月十六日

四等議官

海江田信義

一九五 岩倉具視書翰〔三條實美宛〕 明治七年九月廿四日

一 別紙機密覺書は御別席御談し申度件々に候

一文部省定額別紙御廻し申候是も一應得と御評議無之は御互信義不相立事と苦心に存候

一 御評議覺書と申分は御兩公御相談申度存候分に候

右早々如此候明日八時參院萬可申伺候早々以上

九 廿四

具 視

三 條 公

尙々明日尾州邸御同行之事は公にも御用有之由小生伊公使入來又大隈赤坂參入に付旁かねる御斷り御申入之事と存候也

一九六 木戸孝允書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年九月廿四日

尊書敬誦仕候御示之別冊二綴とも披見仕候是等は必竟昨日も申上候通其根本強而御推立相成候處より隨而あたまを舉げ候次第に其病之生し候事は頓により聊懸念仕候事に御座候如此之弊は實に又朝廷上之一大弊と奉存候乍去御動搖不被爲候得ば決る格別も有之間敷尤右等之人物ともは探偵に亦も被仰付其根元は御詮議被爲在置度奉存候則別冊は返上仕候恐々頓首九拜

九月廿四日

再白中山從一位公始はいかなる建白を被成候哉先達御建白と歎申事は承り候へ共事柄は一向承知不仕候中山公始も驚入候次第に如此御舉動 朝廷之御爲と被思召れば歎息仕候さて建白之人名根元等は警視之川路利良等へ内々御尋相成候は、相分り可申且又右等之舉動も内密御示に相成居候方可然歎と奉存候敬白

一九七 岩倉具視書翰「三候實美宛」 明治七年九月廿五日

一西郷召都合之事

一戰略目的之事

一各國公使被招之事

一珍彦海軍從事之事

右等談し之爲め三時頃より只今迄久光方行向懇談仕候右次第明夕に

も參拜可申上候外に上置候覺書類之事も是非々々御談し申度今日久光之口氣清國事件模様次第進退可被致見込と相見へ候全く憲國法云々拜命無之は不承伏之事と被考候過日來安田海江田等頻りに内情申出候處無相違被考申候去りとて海陸惣督の如き随分憤發見込も有之候事かと被存候何分明日萬々御相談兎角判然御見込不被立候は只様御面働は勿論實に大事と存候也

○二位局示談の事も随分大事也明日可申上候

○北白川宮之所今朝入御一覽に候通り德卿に被申入可然存候と示談申置候事也卒爾に申入御不審と存候久光へも申置候○宍戸にも神鏡云々申置候是も久光同意に候不取敢一筆如此候也

九 廿五

具 視

三 條 公

一九八 中御門經之意見書「岩倉具視宛」 明治七年九月

答議

今般渡邊昇建議獻金之條件一覽を遂げ懇切の忠告感謝に堪へず曩日に會館よりも臺灣征討清國應接の始末を示されん事を三大臣に請はれしも則應分の力を致し國恩萬分の一を報せんか爲なれば昇建議の條件誰か異議を存すへき速に實効の擧らん事を企望す抑臺灣問罪の始末過日書取見せ下さる其利害得失の如きは今更論して益なし既に支那政府との隙を生し辨理大使を差向らる未だ和戰のいかんを知らずと雖とも自然談判の末戰爭を開くに至らは實に我國未曾有の大患にして豫め之か備へを爲さずんはあらず就ては今日急務とする所は國本を固ふするにあり國本を固ふするは軍資充實するの外なかるへし若夫軍資乏きときは假令幾百萬の勇兵有りと雖とも進ては戰ふ克はず退ては保全する克さらん然れば則何を以

萬里の波濤を凌ぎ敵國を征する事を得んや資金充實して後始て強兵ならしむへし故に今日の急務は資金にあり資金乏くして進退時宜に應せず兵士使用の適度を失せは終に清國の掠奪を蒙り彼か奴僕に使役せらるゝに至らんも知るへからず如是んは眞に國家の大患にして亦各其身に比及するの災害たれば國民たる者宜茲に着目注意して各臣民たるの義務を誤つ事なく富國強兵の基本を立ん事を思ひ非常の節儉を加へ軍資を助け奉り兵士をして糧食欠乏の顧念なく進勝の算を固くし古へより未だ曾て國辱を取さる

皇國の武威を海外に輝かさん事を祈請すへし此則人民の義務にして國恩を報すへきの秋也況乎華族の如き常時爵祿を忝ふし王民の間に位し殊渥の恩遇を蒙るをや宜衆庶に先し應分の力を盡し國恩を報せずんは有へからざる也既に此比 禁内にも非常の節儉を行はせられ諸官省已下各出格の節儉を加ふべきの御布令あり之他なし軍資に備へられんか爲なり然れ

は則同族に於ても亦各出格の節儉を爲し勉めて軍資を補ひ奉るへし然と雖とも只に奮發に過ぎたちまち妻子凍餓に至らんも然るへからず各祿の高下を論せず貧富適宜に任せ成へく勘辨を加へ應分の金を出されん事を今や軍士は薪に臥し吾に寝ね膽を嘗むるの秋なれば臣子たる者何そ美服を着し美味を食し晏然消光するの理あらんや宜艱難を國と共にし薪に臥し吾に寝ぬるの思ひをなし銘々非常の斷を以て國恩に報するの實効を奏せん事を如此んは始て會館建設の主意徹底し亦以聊義務を表すると爲ん且隨つて衆庶を鼓舞し人民大義の然る所以を知らしめ國恩を報せしむるに至らは則

王室を保護し奉り國家を維持するの義に背かさらんか宜各夫家經を算し出金或は出米の高を決定し速に獻納を出願せられん事を企望す僕や薄祿微少と雖とも聊家祿の内を獻納し應分の力を致さん事を欲す幸に加入を許さるれば欣悅之に過す謹白す

甲戌九月

一九九 嵯峨實愛書翰

岩倉具視宛

明治七年十月朔日

先時御書被下候處參内中御請及遅刻候段御斷申上候先以御安泰奉賀候然
は昨夕は參拜不相變御懇親御馳走頂戴御禮申上候其上御憂慮之御衷情御
吐露被下猶又僕輩心得方にも相成候儀共御教諭被下候段感銘拜謝仕候例
之僕失言欠敬共恐入候御寛恕奉仰候御言談中秘中之秘不可謂流言等御打
明被下候段返々御懇情之至厚く胸中に銘置申候池田卿にも猶申合置申候
扱又建白四通被爲見下一閱返上候右建白に付るも全嫌疑不可避實に慨歎
之事に御座候右四通儘に完璧仕候御落收可被下候

一今朝は中山伊達池田從二位僕四名被爲召過日申上候一條之勅答被
仰下畏拜承仕候先不取敢今朝伊達參上右御報告申上候事に御座候委曲
は聽取被下候事と奉存候

一昨夜拜見之御一閉は池田へ相傳池田拜見濟次第返上申傳置申候
一昨夕極秘中之秘之事都合能御成就爲天下仰望仕候昨日も申上候通り中
間周旋之事は素より心掛居候事故萬一も八人へ御談にも相成候は、身
分一杯之所可相盡候併御苦勞之末故逆も見留めは無之候何分兎角御盡
力奉仰候外無之日夜奉望候

右御請耳荒々奉言上候近日手腕麻痺別々亂書御斷申上候勿々頓首再拜

十月一日

實 愛

岩倉公閣下復

二〇〇 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十月七日

今日下官出勤可仕處風邪感冒困却在恐入候得共不參候條宜御依頼申候
扱川村方甲鐵艦之買取取止之義に付云々上申書大隈へ相廻し置候間何卒

至急御指令御取計有之度候拙考はフラシル鐵艦は申立通御取消可然存
候別に軍艦御買取之義は他日別段御評議に相成候方にても宜歟と存候猶
衆議御聽給度候青森縣之事別紙之通返事有之候和田之處は先司法之方可
然候半歟伊藤にも御談し願候
大隈申立國債評議事は餘程難事と存候豫め參議中へ御申聞左府始相揃候
様日限御取極願度候朝に候へは小生は十日獨乙館へ十之外何日にても宜候
御都合次第參朝前尊邸に集會候てもよろしく候右之件々今日不參に付相
願度如此候也

明夕五字大山申遣し候御來會奉希候

十月七日

實 美

巖 倉 殿

二〇一 岩倉具視書翰案〔大久保利通宛〕 明治七年十月十五日

追々秋冷其地は殊に寒冷之趣如何候哉先以御安全在清日夜御勉強之事追々之公信一見欣然之至に候

聖上益御安寧被爲渡無御意懈怠日御臨幸且三職隔日皇居參入萬申伺別而國事御擔當恐悅此事に存候條公始め新參議一同無異勵勤決して無異議御放慮可給候勝參議先日來十日不參而已山縣何邨にも大勉勵緩急必死用意重疊却る御放慮可有之候内地何も替り候事なく只々

皇清開戦立至るべくやと人心一途に出貴卿之報知屈指御待申候迄に候鹿兒島も到る平穩之趣大山も當月初め歸朝今十五日より舊縣下行歸京之上かねる御承知之通り奉職と存候此人歸來幸甚に候吉井も當月中には歸朝之旨大山話に候高知縣も爲差事無之候得とも一時は寸志兵とか唱大兵可募立の由に候得共右出願於陸軍素より御許可無之其後之所格別懸念の次第にも無之候然は貴卿去月十日北京着到以後之始末公信に巨細承知致

し申すも愚に候得共今度之任實に至重至大御苦慮之程千萬令遙察候此上御盡力を以る和戦片時速に被決候事専務と渴望致し候英公使パークス折々入來頻に平和に至り候様忠告又和解も致度候模様之口氣有之候各公使粗同意に被推察候獨り魯公使竊に言速開戦の方御國の利也魯政府に於るは必御國の爲に盡力致すならん云々語あり是れ魯の爲め謀る所あるへし難盡筆頭吉多に申含置候間御聞被置可給候

十月十五日

二〇二 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治七年十月十五日

追々寒冷其地は霜信早到之趣如何に候哉先以御勇健日夜御奮勵之狀毎度之公私書にて承知欣然之至候 聖上倍御安寧被爲涉定日政廳御親臨且大臣參議隔日皇居參入萬機の政被聞食別る外務上に就ては御専務被爲遊恐縮此事に候條公始新參議に至る迄一同勵勤決る異論枝梧之憂無之御放慮

可被給候山縣川村大奮發緩急に應ずる必死の用意重疊至極御願慮不可有之候内地も異狀無之只々兩國開戦に立至る可くやと人氣相振上下一致貴卿の報信を屈指企望之姿に候鹿兒島は至て平穩高知は一時志願兵とか相唱へ大兵可募集由に候處右出願は素より陸軍に許可無之其後格別懸念之筋不相見候貴卿北京著到後之景狀は書信に熟知致今更申も愚之至に候得共今回之御出張は其任至重至大殊に盤根錯節頗る御苦慮之程千萬令遙察候此上御盡力を以て和戰一決一日片時も早く其成局專要と日夜渴望に不堪候英公使パークス氏時々入來頻に平和に歸し候様忠告又調停致度口氣も有之他の各公使も略同意の様に推察被致候獨り魯公使は窃に開戦を速かにする方御國の利なり魯政府に於ては必ず御國の爲に盡力可致云々との語あり畢竟魯國は自國の爲に別に謀る所有之儀と思料致申候此邊御含迄に内啓致候御聞置可被給候何分前途之利害得失は筆頭に不可盡候先は一筆艸々如此候也

十月十五日

具 視

大久保辨理大臣殿

二〇三 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十月十七日

清國和議破候節は軍機不可失肝要に付兼而河村大輔見込も有之内々承居候事に候追々時勢も切迫候に付は同人を可申上次第も可有之と存候得共猶當人深意密々御直聽可給候仍此段早々申上候也

十月十七日

實 美

巖 倉 公

二〇四 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十月廿一日

岩倉具視關係文書第六（明治七年十月）

二百三十七

今日は御奔走實に御苦勞奉存候川村入來書面相渡候處承諾請取申候猶山縣野津等にも安心致し候様同人方可申入相命置候決る御懸念有之間敷と存候山縣之處如何哉と甚配念仕候今朝御談之御都合御一筆御示し奉願候全小生之危漏より彼是紛議に涉り候事と恐懼之至に存候草々拜具

十月廿一日

實美

巖公

二〇五 内史書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十月廿八日

別紙百石以上之者奉還之儀不輕事件に付御暇中には候得共御押印相成度且大木參議一旦異見有之候得共終に同意相成候儀に候哉一應相伺候様條公御申聞に付此段も合て相伺候也

十月廿八日

内史

右大臣公殿下

御直披

二〇六 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十一月二日

向寒之際益御清勝御奉職被爲渡南山壽頌仕候然臺蕃一事談判實に盤根錯節を極め不容易苦慮候處遂に先月卅一日及訂約我討蕃の舉を義務と爲見做十萬兩^{テイル}を難民撫卹銀とし^{琉球を以て我屬民と見認めし一確證也}四十萬兩^{テイル}を蕃地にて我修道

建屋せし費用に充て^{兵費の名清人所嫌故に名目を替て如是}

總計五十萬兩の償金差出候に付撤兵可致と議定相成候固より和は可貴して戰は危事なれば此名義を得遂に償金の利を占め候事は萬々好都合に候得共金額僅少にして從來の用度に不足は申迄も無之就ては本邦上下の物議如何可有之哉甚た回顧愚念仕候尤遠地隔絶實情不通に候得共追々新聞

紙等によれば士民奮興氣度恢張之趣に有之旁配意致候乍去柱石骨鯨の大久保深く利害得失を計較して被斷決蕃地へも同人渡航親しく宣諭相成候得は此上紛議も無かるへき歎抑當地の事情和戰紛紜と候得共總理大臣深く戰を憚り且激論家も必勝の兵略無覺束より遂に屈撓退歩して茲に到り其實不容易變通に候先は内外事情を直像し内々閣下迄此段及密啓候何れ下官にも皇帝謁見相濟候得は速々歸朝可仕候間萬緒得拜晤可申上候先は極密拜啓如此候也謹啓

十一月二日

清國北京

柳原前光

岩倉老公臺下

副啓清銀五十萬兩は大凡そ西洋ドルに比較し七十萬元に相當可仕候此段も爲御心得及再啓仕候也

二〇七 島津久光書翰

〔岩倉具視宛〕 明治七年十一月八日

別紙只今條公より御廻し披閱相濟差上申候御落掌希候也

十一月八日夜

久光

右大臣殿

先月三十一日支那政府と條約承印したり本月一日我北京を退そき本日上海え到着す我厦門へ行き且つ都督と退兵の義を整える爲め臺灣へ集會せし後復命の爲め歸る可し福原大佐及び其他は本月五日チイフウを出帆し委細の廉を上申する爲め本月十五日迄に東京へ到着す可し同人到着せば大至急都督へ退陣の事の命令を與へ全軍引戻す爲め汽船の運送を我希望す又大至急病人を向える爲め汽船二艘連送の用意豫め有るを乞ふ第一條五拾萬テールを支那政府難民撫育の爲めと陣營道路の雜費として

拂ふべし償金内ち拾萬テールは當地にて一時に請取残り四拾萬は同地に於てともに十二月廿日に請取る其れか爲め退兵の事も同日に限る事なり第二ヶ條我出兵の正當なる事を承認す第三ヶ條臺灣に關係する此の後の議論は取り消し此後の難實なる漂民は生蕃人ののそみにて支那政府より要護す辦理大臣より正院え右傳信只今上海の辦理大臣より致落手候十一月八日午前五時十五分發す

横山 權助

林 大佐

大隈長官殿

二〇八 岩倉具視書翰〔徳大寺實則宛〕 明治七年十一月十二日

拜承爲 勅使東久世被命候旨重疊可然存候侍醫の事云々兎も角厚きに被失候方はよろしく臺灣は實に難地之趣又病者乗船後之都合も可有之と存

候數千人の事故數
船に乗別れ候か 則醫も分乗の事と存候以上は兎角思召御伺に御決定可

然存候右御請迄如此候英公使方向中御請延引候早々以上

十一月十二日

具 視

徳 大 寺 殿

猶々内々申入置候來る十四十五兩日の内時機にて英公使内謁見被仰付度義出來候も難計候間御心得置願候也

二〇九 岩倉具視書翰〔大久保利通宛〕 明治七年十一月十二日

一翰拜啓時氣彌寒冷に向ひ殊に異域水土之變換動靜如何と懸念罷在候處愈御清健之趣在清書信及過日歸朝官員之口頭に由り詳悉承知不勝抃喜候聖上倍御安泰被爲渡御國內至る靜謐御降心有之度從る迂生依舊頑健奉職罷在候間御省念被下度然は今回皇清兩國之事案古來未曾有之大困難結局

如何之形勢に可立至哉と日夜苦慮罷在候處頓に平和に歸し且御國威益隆盛を表し候運ひに立至候事はれ偏に祖宗之御冥護今上之御稜威に依る所とは乍申足下憂國之赤誠愛君之忠純は前きに丁卯復古之際に現はれ今復大に斯に發揚する者に有之上は宸襟を慰安し奉られ下は蒼生陷溺之苦を免れしめられ候段前古無比之大功に而叡感殊に淺からず廷生の如き曾て死生を共にせん事を誓約せし輩に於ては爲國家大慶は申迄も無之今日之如き大愉快は無之候其實蹟は數回之信書中に詳悉にして始終御遺算無之段眞に感伏に不堪候今夕勅使將に解纜せんとす勿々寸楮を裁し以て國家之大慶を稱し併せて動履之安寧を祝し申候聞道蕃地は瘡癘之鄉強健を化して羸弱と成すと暫時之御滞在とは乍申頗不堪憂念候千萬爲邦家御自愛有之度致希望候不遠拜顔を期し既往を顧み將來を慮り千言萬語可相述と存候先は閣筆致候頓首再拜

十一月十二日

具 視

大久保辦理大臣殿

二一〇 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十一月廿日

本日賞勳局が西郷へ臺灣事件賞金賜與之事伺有之候就亦は大久保參議支那行之賞之事は如何之ものに候哉先頃一寸伊藤之話も承り候今日伊藤に御逢被爲有候は、御談願度候急々如此候也

十一月廿日

實 美

巖 倉 公

二一一 岩倉具視書翰〔上野景範宛〕 明治七年十一月廿三日

御出帆後海路平穩無恙御著港之事と欣然令遙察候儲發途前は支那談判不

容易形勢中外紛議不少定めて懸念如何計御苦慮と存候然る處公信御承知之通りにも意外之結末に至り爲邦家大幸不過之隨而被安宸襟候は申迄も無之全國上下人民欣喜踊躍不可謂之次第にも小生輩には隔世之心地致し初めて安眠致候次第萬御放慮可給候扱兼る及依頼置候次男龍事勉學之模様始終之進退如何と懸念不少現場御見聞之上萬端御心添之事吳々懇願致候御用閑一筆御來示有之度候將又其地留學三宮義胤なる者小生御一新前より懇意御恢復之節には不一方盡力致候者に御座候然る處自費留學之節に至り必死と難澁之趣にて何卒英公使館屬官拜命致し度頻りに内願申越候當人何程學術出來候哉素より承知不致候得とも定め御附合にも可相成御賢考を以て御用立候見込も候は、何卒登用之義御申立有之度尤欠無之候は不被行義兼る御含可被下候此義發途前會食之節可申談心得之處掛違ひ其後面會之節も倉卒失念致候事に御座候早々如此候也

十一月廿三日

具視

上野公使殿

二二二 岩倉具視書翰

〔榎本武揚宛〕 明治七年十一月

聖上益御安寧被爲渡御國內平穩御放慮可有之候足下にも爾後彌御清穆御奉職魯國皇帝陛下并に政府より別る懇親を表し接對有之候趣兩國之爲實に幸甚貴職之御勉勵深く遙察致候尙將來愈親密之處所祈に候本邦在勤魯國代理公使無異勵精能く其職に従事致され各國之公使中にも取分拙者には懇親往來致候間序を以て魯國外務執政へ其趣御話通有之度候御出立前本の儘珍事御報示相願候處御忘れ無く御通信被下御厚意深謝候尙今後不相變御垂意企望候也

明治七年十一月

岩倉具視關係文書第六 (明治七年十一月)

全權公使榎本殿

具 視

二一三 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十二月十一日

十一月十七日付貴翰昨十日上海にて拜讀候殿下益御安全奉欣賀候然臺蕃の一舉好局に就き候に付縷々御内示之趣奉拜承候右は上皇上之聖德により下大久保氏の勉勵遂に茲に至り候儀にて御賞詞汗顔之至に御座候却説先月廿九日午前十時清帝に謁見國書遞呈鄭書記官を臨時代理公使とし清歐官吏に告辭何れも至極都合宜敷翌日北京出發天津にて李鴻章に兩回面晤當初の舌戦も今日和交に歸し候故大に舊情を表し懇摯の情を極め歡會握別致し昨日當地に到着仕候既に西郷都督も去三日退蕃之由故此上は清國より可受取殘金四十萬兩來^{テイル}廿日期限故右受取は緊要之儀に付其手順相調候不遠歸朝可仕候何も御安念奉願候下官從者北京出發之途中狼籍

者の爲に石を以て頭に徹しく負傷候得共是以て早速清政府にて罪犯捕縛且諸大臣より下官へ理り狀差越し候右は此末罪人處分政府之義務相盡し候儀と存候先は拜復旁内啓如是候也謹頌時安

七年十二月十一日上海

柳 原 前 光

岩倉老公臺下

副啓愚妹權典侍愛子皇胤懷孕に付縷々御高示奉感謝候右一件も屢次御高配にて大に便益を得候旨老父光愛より申越し海岳奉謝候尙宜敷奉願候公私兩情共不遠得拜晤奉言上候逆旅略復萬々高恕敬白
三白對蕃費用清國より差出候儀誤て償金と布告相成候に付縷々御内示奉拜承候右は萬々一此後清政府より示問御座候節は如高諭辨解致し候様含み可居鄭臨時代理公使へ密示仕置候御多忙中百事御注意深く感佩仕候也

二一四 岩倉具視書翰案〔榎村正直宛〕 明治七年十二月十四日

十二月九日芳翰今十三日村越入來面會慥に落手致候然に兼る懸念之筋及御尋問候未度々事情搜索御通信深く忝存候今便岡印云々に至るは驚歎之至り言語に絶候尙於當方も厚く注意可致候十一月廿日山印應接同廿九日中印應接十二月九日奈印出張云々右三紙御廻し始終分明大に心得相成候申も愚に候得共此上宜敷御盡力御密報有之度候

一去月廿三日書狀一見之旨隨而靈源寺法常寺兩寺其村方へ御下命之義卒然御依頼申候處速に御取計之通御答書之趣深く忝存候

一右御來狀前十一月廿日華墨上搜索書等監部山本復一落手一見致候山印之義失望云々之始末何も承知致候上姓名一紙確實被相達大に得都合申候事に候

一總體之義に付差増極密一筆申入候鹿兒島縣云々頑固人之頼む所總而盡

餅に屬し可申兄西郷氏元方一點疑所無之唯壯士輩に而粗暴之論も可有之存候得共決る御懸念有之間敷事と存候大山格之助俄に歸縣云々何ぞ清國事件事濟に關係せんや縣用不得止次第に御座候御心得迄申入候却る高知縣は追々議論盛之趣に傳聞候得共是逆も壯士之論而已ならん歟取留候義は無之候

右御請迄早々如此候也

十二月十四日

具 視

榎村正直 殿

追る乍例愚息代筆高免

二一五 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治七年十二月廿八日

御念書令披見候御所勞御全快御出仕之旨欣賀此事に候御入念來示忝存候

扱御内用金の内三百圓御返し正に令落手候來人中御請迄如此候也

十二月廿八日

具 視

佐々木 殿

二一六 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年十二月廿九日

伊地知賞典見込一覽差出申候

扱心附候儘左申候參議一同も春來不容易形勢に付るは非常之精勵も仕候事に付思召に金五百圓も此暮賜候るは如何や大隈杯は臺灣一件には不一方盡力も有之候得は何とか御賞賜も被仰付度存候得共一人別段に相成候も如何可有之哉參議一同へ當時出勤之者に恩賜相成るは如何猶御賢慮奉伺度候草々不具

十二月廿九日

實 美

岩 公

二一七 岩倉具視書翰〔三條實美宛〕 明治七年

一 地方官會議御延引御布告文小生は是に格別差支も無之哉と存候就るは山縣申立一般之御布告亦昨夜御廻し申入候外國在留吾公使領事等御達書艸案且以後外國公使御互始め應接振り或は中外へ布達等凡大御旨趣同一途に不出候は萬々不被爲濟事と存候然るに昨日書取るは兎角耳立不可然存候條是は厚く御注意有之今御評議有之度候一 地方官上京之輩には 皇居か尊邸かの中に被爲召右在留公使へ御示之書取同様是迄之形行時機に前途云々其外厚く御申含めには如何哉上京無之輩へは昨年十月一變之節の如く史官御廻し御内諭には如何哉何哉今朝伊藤來會候間同人にも申談し可置候條御聞取可給候

一 柳原書一見返上仕候赤松書狀類拜見願候
一 今日十二時孝公使會食候間令不參候
右早々

具 視

三 條 殿

二一八 岩倉具視書翰〔西郷從道宛〕 明治七年

寸檄肅啓 聖上御機嫌能國內靜謐御降心有之度貴丈異域瘴癘の地に數閱
月御滯陣櫛風浴雨之御苦辛健障如何と掛念不休然は清國談判如何と苦慮
旦夕吉信渴望之處吉報を得尋て屬官歸朝有之聞く葛藤俄然と氷解し名義
判然遂に償金を領收する結約に到る由開國以來未曾有之盛舉 皇威海外
に暉き上下一般萬歳を唱へ候抑此舉談判宜を得ると雖畢竟貴丈出軍之後
速に征蕃成績を奏せられ武威致彼之勢に據るへし殊に十八蕃社信服懷從

幾千之士卒一も無違令貴丈之徳威二つなから顯然
歎感特に深し吾輩に於ても感歎不知所言此上公事裁了海上無異狀堂々た
る凱陣屈指相待候命使發遣に托し光慶を具す自餘期近見閣筆候也
具 視

西郷從道 殿

副自重萬祈小生無恙扱申述迄も無之候得共社民一統へ清國談判之顛末
を説き懷安施教爾來今日に到て愛情不忍捨今我管轄を脱すとも以後清
國の改化を遵守し益開化に趣けは我國王に於ても満足たるの情懇々御
説諭有之度企望に御座候也

二一九 岩倉具視書翰〔青木周藏宛〕 明治七年(月日不明)

御投書披見海陸無滯御着遙賀之至其國皇帝并皇后へ謁見首尾克御濟之旨
公信にても承知嘸々御安心兩陛下より傳言之義是亦致承知候支那結局御

承知御同慶實に

聖上之御幸運なり就ては内國政務一層精密に調理可致様御説諭之件々銘肝忝存候御出發前御相談申置候公信往復之一事未た着手不相成云々承知外務卿へ可及示談候黒田河村歸縣之事に付御懸念御尤併決之御案之如き譯に無之御安心有之度候多忙中復書延引御海容有之度候御保養御盡力是祈

青木周藏殿

別白妻大病不起御承知御訪書忝存候別之差障等無之御安意可被下候

二二〇 岩倉具視意見書

明治七年

征蕃順序略記

客年來出師の評あり其論二三に分れ韓と云魯と云蕃と云皆名義を存すと云へとも兵に強弱あり事に難易あり名に輕重あり理に先後あり其權衡に

因て本年廟議遂に征蕃に決す其名に於けるや明治四年琉球人五十四名生蕃に漂到し土人の爲に慘毒殘害に遭ひ復た明治六年備中人四名同地に漂到し暴手剝奪に罹る於是問罪の議起る其先き明治六年副島を公使とし柳原を一等書記官として支那へ發遣し清官と接語中琉球漂民之事に及ぶ彼れ更に生蕃人を處分するの色なく只政教の及ばざるを以て答ふ柳原即ち我獨立國の法を以處分するを告置て去る是れ我政府義務に於て問罪せざるを得ざる所以なり遂に本年 月西郷中將を都督とし幾許の兵を出し軍門を崎港に取て軍艦を整ふ更に臺灣事務局を崎陽に設け大隈參議を局長とす茲時に際し圖らずも米人雇入れ船艦借入れのことに付外國公使より紛議を醸し内には出師の失當を奏する有りて内外公使物議紛々たるを以一時發艦延期を議し内論を領して大久保參議を崎陽に急遣す其前太政大臣の文書を齎らし都督及局長に達するに大久保着崎迄不解纜を以てす大久保五月三日着崎す臺灣事務局に於て實況の顛末を問ふ答に曰く既に

四月廿七日夜福島領事雇米人カッスルツスンハウス三名を卒し福州總督へ公告書を齎し厦門へ向け發艦し續て五月二日谷副總督赤松少將護兵千餘を卒し四艦社寮へ向け出帆す但太政大臣の告文は閱すとも兵氣勢ひ支へ難き情實あり且つ先 勅を墨守し殊に都督は閩外の權あるを以處置此に及ふと云此に於て大久保大隈西郷談判熟議の末へ大久保は御委任の權内を以悉皆發艦を裁定す又不得止の情を歸京して復命す五月二日柳原を公使として清國に發遣す内諭を柳原に賜り彼の政府に照會せしむ又柳原上海に滯在中總理衙門より我外務卿に照會する文書に出兵の所以ん且虛實を問ふ蓋し此文書柳原と行き違ひになる舟艦崎港を發し漸次臺灣に着し暴民を探り罪を糾さん爲探候の兵を上陸せしむ彼れ發炮するを以直ちに兵を整へ三手に分派し敵地に突入す自他死する者あり遂には我兵銳を恐れ降伏するあり僭匿するあり六月廿三日谷少將都督の指令を以歸朝し凱旋を奏し閩社悉く不日降伏を請ふの實況を上申し且つ爾後の處分を謀

る都督へ委任書中但書に一應 廟堂於是兵の去留を議す具視等殖民に手を下さ伺出へき文意に依てなり 廟堂於是兵の去留を議す具視等殖民に手を下さるは勿論降伏の以上は此機會を失はず速に兵を引揚げ然して支那政府談判は其後に附せん事を要す是れ顧慮に過ると雖とも交際上に障礙あらんを恐れてなり然り而して衆議多くは兵を揚るを不可とす其所以んは兵を揚げて後は支那談判却て葛藤を生し彼れ益狡黠を逞ふせん故に我兵結局裁了迄寸歩も不退を示し我か糜する處の財所費の人命も清國義務の怠りより出る所以を以相當の償金を出さしめんにかかずと然る不得止ば戦にも可及云々の廟議に決す七月九日右廟議の旨趣演說書を以て外務省出邊に齎らし且口傳を添へ柳原公使に送り此意を體して接談せしむ蓋し柳原公使清官潘爵と談判口に聊戻るへ七月 日臺灣報知に曰く潘爵渡蕃西郷都督に迫しと雖とも舌闢纏縫に附す 七月 日臺灣報知に曰く潘爵渡蕃西郷都督に迫り問答の末へ償金を出すやの意語氣に顯はれ談判の緩なるを知る七月 日潘爵福建より上海にある沈秉成を以柳原に照會且沈秉成應接及ひ公使より潘爵へ覆照する書あり潘爵先きに柳原と約し共に西郷と談し後に柳

原に答ふ皆矛盾に而詐欺あり彼を侮慢する乎將た我を疑惑せしめ兵鋒を折かん爲乎其狡黠此に至りて益知るに足る公使於是憤怒し直ちに北京に馳せ謁帝を乞ひ若し其事を肯んせざれば歸國を告て去らんとの決心を報知す其顛末知るへからずと雖とも此際に方りて交和忽ち破れ兵機急に發するも測り知るべからず勢ひ此に迫るに至りては前日の見込百官有司異同あるとも一致を以國威を張り深謀遠略内守外防兩ながら欠ざるを緊要とす

一 交和斷破すれば客戰主戰孰れか利なるを議すへきこと形を以論すれば主たるは安く客たるは難し勢を以論すれば主は難く客は安し○全國有米今幾萬あるや調のこと○客戰となれば崎陽の米價を高くす自から集湊すへし○海岸要所防禦の事○全國へ支那義務を欠き我に不條理を以て待する實況を布告し彼を惡む意我國を愛する情に仕向ける事○一般士族へ武職を至急に與へる下命の事○戰の有無に拘らず此度の名を以

て冗費冗員を省く大改革機會の事○土木營繕新營は無論既に伺濟の分たりとも事業半ばに至らざる分は手留に可致諸省府縣へ急達の事○華士族平民を論せず小銃彈藥所持の員數調置事○各縣中工者なるものを呼出し彈藥製造せしむる事○軍艦買入るゝも運轉人有無考の事是は外國人雇用の故ひ難きなり○事決する以上は各國公使へ通達且懇議の事○各國の情探偵の事○華族祿を當年限り千石以上は半等九百石以下は三分一引掲の事○敵國地利校窮の事○某人曰く外敵患ふるに足らず内患を生ずる原因に注意すへしと其故は

一 楮幣出高一億萬圓以上

此に充つる

新貨既成の分凡六千萬圓

内

凡貳千萬圓は海外へ越

凡四千萬圓 内國官私の内におり
外に

豫備金千四五萬あらん乎

新貨即今有高以て楮幣と差引すれば

紙幣空物となる其多少莫大なり

人心此に心付けば新貨を蓄はへ空物の紙幣を嫌ふ遂には一圓札を二歩一歩の位にならん此れ内國の大患となる所以なり深く注意無るへからず
○戦に決せば地方官員集參延期を達し地方政務を盡力せしむへし

二二一 岩倉具視建白書

明治七年

五月十五日臺蕃問罪の師を發す陸軍中將西郷從道都督たり又全權公使柳原前光を清國へ派遣す既にして臺蕃附順清國葛藤を生す八月六日更に辨理大臣大久保利通を清國に遣る抗論數句盤結解けず和好殆將に破んとし

て事僅に諧く十一月三十日清國我義舉を證し國貨五十萬を致し條款を交換し以舊誼を復す利通十一月廿七日前光十二月廿五日を以歸朝し從道廿七日凱旋す此舉や使臣武官の勉勵に由ると雖とも亦闔國一致の外揚するところ陛下の洪運天授に非ずして何ぞや然る臣退て考るに陛下曾て臣等を薩長に使せしめ又臣等を外國に趣かしむるもの大に内外を權衡し政體を釐革せんと欲するに在り而して臣等歸朝以來勿卒年餘を経て未當初之聖意を發揚する事能はず就中征蕃之舉臣の首唱に係る一旦功を奏すと雖とも得る所失ふ所を償ふに足らず臣罪萬々遁るゝ處なきを知る將に別に罪を乞ふもの有んとするなり靦顏徒に職を辱しむ可らず

明治八年

一 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕 明治八年一月十六日

御安全奉賀候昨夜は御草臥と存候扱下官義昨夜中も不絶腹痛致候于今微痛相覺此天象殊寒氣に困却仕候仕合若御憫愍給候は、今日之處不參仕度伊藤下坂之儀は兼而御談申候通大久保之報知次第被仰付候様可然存候大隈其他之處へも少しは情實も相洩し不申ては伊藤之發足も如何可有歟と存候極密程能申聞候も無子細事と存候左候は、決し而異議も有之間敷と存候木戸之處も都合次第君側之勅使被差遣候も可然事と存候下官是非參朝不仕候而は不相叶義に候は、御參給度候先以甚恐入候得共御配慮奉願候仍右得貴意度如此候也

一月十六日

二伸 伊藤へも宜御申傳奉願候彌イ藤下坂之事に候は、島津へも何と

岩倉具視關係文書第六 (明治八年一月)

二百六十五

か不申入候は如何と存候尙御勘考奉願候

實美

岩倉殿

二 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年一月三十一日

御安全奉賀候御不例御困之由厚御加養專祈候過刻御内書之趣拜承候松方
之事は黒田へ託し本人情實も承候長官之處置不平之件に有之候由に候併
不日には出仕可致と黒田申居候四十萬兩之事大木へ相尋申候同人少々意
見も承り候猶近日拜上候最早大久保も歸京に候得は別段書狀遣し候にも
及間布と存候朝鮮書簡之事は島津へも土方を以て可申入と存候英公使議
論之事は大隈が政府へ書面差出し多分穩に相濟可申と存候今日午後英公
使外務卿引合の筈に候新聞之事は中村へも篤と取調候處小生之無念も有
之恐縮之次第に御座候賞典催促之事は大木へ篤と申入置候榎本井上之事

は大久保歸京迄御見合候事と存候地方會議之事も催促仕置候右要用而已
拜答候也

一月卅一日

實美

岩公

三 檳村正直報告書〔岩倉具視宛〕 明治八年二月三日

一中沼良藏息清藏先月中頃出足東上其旨趣は昨年良藏建白書差出候處左
院の國事關係之建言に付上申之段御達相成候に付建言之趣御採用にも
相成候都合と心得東上候由然共清藏未だ東京に着不仕趣いつれに僭伏
候哉不相分候

一山本克是も先月奈良遊覽として出足其旨趣は昨年傲然なる建言候付て
は西京にては嫌疑不少奈良には岡部參事ありて彼よりも身を潜むるに

は彼地よろしからんとの心付もあり旁奈良の巡覽として居る是亦薩は身を潜るにも事を成すにも便利なる地と見込之趣

一先月下旬頃薩之書生三百人計蒸氣船にて崎陽を發し其半は東京へ登ると云此書生は一片之書生とも不相見由

右之通風説有之候付申上候事

亥二月三日

横村正直

岩倉公閣下の御直覽

四 岩倉具視書翰〔黒田清綱宛〕 明治八年二月十日

本願寺分離達向之義に付内々伺出候情實有之承度候ヶ條御坐候萬一達之節行違出來候ゝは不都合に付至急御面會申度乍御足勞今日五時迄に御來入被下度御待申候若又今日御差支或は御不在等に候は、明午後第二時御

來入被下度達に相成迄に必ず一應御打合せ置度存念に御坐候此段御承知被下度候也

二月十日

具視

黒田清綱殿

五 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年二月十一日

御安全奉賀候然は過刻御話有之候分離一件教部へ御達替相成候事尊君へ御報知漏脱相成候義重疊不都合之事恐懼之至候愚考今朝申上候通西本願寺々教部省へ分離御許可を蒙候上は興正寺の望に任せ返答可致教部省へも其旨御届可申旨相答候は、夫に先分離之御達に相成其上二段に興正寺へ御達に相成候は、可然事と存候教部省に疑惑有之候は、其儀は御互に請合候ゝも宜事と存候教部省も其上彼是相疑候は、甚不可解事と存候

黒田へも右之處御通し速に埒明候様可致御沙汰有之度候同時と申事は順序も不相立本願寺も居合申間敷徒に時日を遷延候ては誠不可然と存候間早々落着相成候様可然存候仍右更に申上候也

二月十一日

實美

岩倉殿

別紙返上仕候

六 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年二月廿三日

御安泰奉賀候下官今日參勤之處少々腹痛下痢仕困却之仕合に付何卒一日加養願度存候若御評議之件有之候は、押出勤可仕候間御示給度吳々恐入候得共今日丈休息相願度候昨日御内談之事宜願上候木戸彌着港否御取調奉願度候草々拜具

二月廿三日

二伸 眞宗分離興正寺一條段々差縫候様子に承申候今日は教部大少輔より伺出候哉と存候右一條頃日指令替之義に付不都合有之候様に存し恐懼之次第に御座候頃日来之行掛に付拙官引請可申候間自然教輔參朝伺出候は、下官の申入候様御沙汰奉願度候草々頓首

實美

岩倉殿

七 安場保和書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年三月三日

昨今御懇命之件々奉服膺候地方會同に付可取調積に別紙差上候内元老職一條 御秘算に違ひ愚衷申上候心事は實に天下の重任に被爲當非常御危難を不被爲願一層御擔當從來弊習の根本を御拂被爲成度思召實に奉感戴一度は銘肝服膺之外他事無御座處退て再三御運歩の際を熟察仕候得は和

漢西洋古來の轍英雄事に處して謬る所以宿弊を拂ふに急迫に陥らざるなし是英雄の失なり仰願くは深御熟慮被爲在愈以公明正大を御所置所謂誠心を披き公道を布き玉はん事を是迂儒事機に暗き空論と可思召汗背之至に奉存候實に治亂の機此御一舉と深奉懸念候々様申上候得は何か折角の御精神を撓め奉り候様にて恐縮之至に候得共愚衷決て御精神を損し候趣意に無之御規模を深遠悠久に貫徹させられんを奉望候愚衷御垂憐奉仰候一内務大少輔は大久保卿十分の頼みある人を聊頓着なく精選有之候様御委ねの事最今日之急要と奉存候

大藏卿年始之上奏吳々御含奉仰候其他之事件は萬機衆論公議を被爲盡候上御決定奉祈候

右愚念之餘猶陳上仕候頓首百拜

第三月三日

安場保和

右 府 殿 下

再白 鮫島副議長の一條も保和數月間反復愚考之上申上候事にも猶御熟慮御配送奉仰候頓首

八 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年三月十五日

前略高免

今日左府面會之義申遣候處病氣にて斷りに御座候如何致可然哉彼一條も木戸板垣頻に急居候間明後朝は御沙汰に相成候様無之は不相濟と奉存候粗は下官義頃日來談置候義に付奈良原呼寄可申入哉猶一應尊慮奉伺候草々拜具

三月十五日

實 美

岩 公

九 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年三月十八日

別封唯今到來候間御傳申候書面於下官甚不感服之事に存候大臣之所爲に
は不似合之事に存候猶拜上萬々御談可申候別紙は御寫取にて下官へ御戻
し奉願候大久保には内々御泄し置可然存候草々拜具

三月十八日

實美

巖公

春暖之候御兩公愈御壯榮御奉務奉大慶候右府公には昨日御來駕之處腰
痛に而御面會も不仕失敬之至偏に御海容相願候就而は長々不參別而恐
入奉存候全體之病夫是疑惑不一方盡力之方向に迷ひ申條件左之通
一去壬申年西國御巡幸之節愚昧之ケ條書呈上候處御下問之故を以上京被

仰付候得とも至今御採用之有無御明答承知不仕候事

一去夏頃三條殿御邸に集會之折差出候二十ヶ條之疑惑御確答今に承知不
致疑惑彌增長之事

但其節之書面御見合之爲差上申候

一大隈一條大臣方之御約束相違無之事と存候間御催促は不申上候事

右之外細事は多端有之候得とも筆端之盡す所に無之事

右之通に御座候間此節は是非三五日中御明答承知仕度不恐忌諱此旨歎訴
仕候頓首

三月十八日

久光

太政大臣殿

右大臣殿

- 一先王の法服を洋服に改らるゝ事
- 一太陽曆と稱して西洋正朔を用らるゝ事
- 一玉座を奉始各省總て洋風に模擬せらるゝ事
- 一各省に洋人を雇ひ彼の教示を受る事
- 一侍讀其人に非る事
- 一侍臣阿諛の輩多き事
- 一兵卒を君側に近くる事
- 一官員等驕奢淫佚の輩多き事
- 一華族の遊蕩を禁せざる事
- 一學校規則洋風を基本とせらるゝ事
- 一都下の禁令苛酷に過る事
- 一擊劔の師を命せられざる事
- 一兵制總て洋式を用ひらるゝ事

- 一不急の土木を興し會計の缺乏を顧さる事
- 一無用の官員増加する事
- 一邪宗の蔓衍を防かざる事
- 一外國人と婚姻を許さる事
- 一神祇官を廢し神佛混合して教部省となされ彈正臺刑部省を合して司法省を置く事
- 一民部大藏の二省を合併せらるゝ事
- 一散髮脫刀の洋風を重んじ束髮帶刀の御國風を賤めらるゝ事
- 右二十條愚意疑惑氷解難仕候に付明白の御教諭を承知仕度不奉願忌諱御尋申上候

癸酉六月

島津久光

春暖之候愈御壯榮御奉務奉大賀候然は過日は卒爾之書面呈上仕候處去る

廿二日御使を以暫く猶豫仕候様承知故に五日差扣罷在候得共何分重大之事件速に御決答御教示を承不申候ては疑惑氷解之期無之且方向相定兼候間何卒今日より先五日中御明答是非承知仕度亂毫を以て歎訴仕候也

三月廿六日

久光

太政大臣殿

一〇 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年三月三十一日

別紙左府を被申越候間御都合度候小生午後は他に約束有之差支申候明後日の方なれば都合よろしく候御勝手御意願度候一政體一條段々延引に不は不宜と存候明後朝參議一同一評論有之ては如何御都合相伺度候

實美

岩倉殿

華墨拜讀仕候然は政體一件不審之廉も候は、可申上と承知仕候且御直答御聽被成度被仰越就不は僕にも御談合申上度事件も御座候間乍御面働明日二時頃を御來臨被下度奉希候尤右府殿にも御同伴に御座候得は別不仕合之至に御座候此段御答旁申上候以上

三月卅一日

久光

太政大臣殿

一一 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年三月三十一日

前刻は拜謁奉謝候然は相國左府兩公御書御内示奉拜披候就不は明一日朝相國御同道左府へ御行向之旨敬承候尙御誠意御貫徹之様岐望候任尊命小

生にも乍不逮考慮を盡し熟算候得は委曲追ふ可奉言上候先は兩大臣御返書返上且拜答迄如斯候也

三月卅一日

前 光

岩 倉 公

一二 佐々木高行書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年三月三十一日

謹る奉言上候昨朝は拜謁被仰付難有奉存候陳は其節申上候元老院云々尙又密々承候處同院には勅任官相勤候向ふ五ヶ年間出仕被仰付候規則に尤 天皇陛下之思召に寄り候と申事之由如何之章程歟いか程之權力御與へ歟は存知不申候得其實に不容易義に奉存候何となれば元老院は勿論國家の柱石と相成候義に佛國にも其人撰は自ら鄭重と相見へ申候依て只今元老院御設候得は先以華族之中凡そ拾人士族平民之中に凡そ拾人

都合貳拾人計御一新之際功勞有之歟又は有徳有學等之向御撰用相成度只様勅任官出仕被仰付候と申事に其弊不少と奉存候方今差向き出仕被仰付候向にも副島後藤由利井上陸奥福岡島本等可相成其他老功之向には岩下とか出仕被仰付候哉とも奉存候得共前體一昨年來大不平を鳴し局外に騷立候節さえ乍恐 廟堂上深く御配慮被爲在候程之朋黨連を相集め出仕被仰付大權を相授け候時は行政上忽ち御難澁と相成弊害を生候事目前と奉存候依て何分共元老院出仕は成丈ヶ人員御減少にて御設け相成左院は昨日申上候通御存置にて 正院之屹度御顧問に備候様之處尤御肝要と奉存候且又元老院御設之權限之處は極御大事と奉存候右邊所謂釋迦に經文に有之候得共弊軀煩慮不少より前後不顧無遠慮申上候段幾重にも御海容願上候也頓首敬白

三月卅一日

高 行

岩倉公閣下

二白 昨日出仕にて尾崎議官が極密承候得は同人が三條公伊藤參議へは申上候由三條公は篤と御高慮之上岩殿の内談可致被仰聞候由伊藤氏は前體左院は存置致度趣意なれ共何分板垣殊更に主張致候間一步を讓候此の上大臣公方御議論有之候は、其節十分見込申上候心組之由伊藤氏之口氣には四參議院と同論にも無之光景之由右板垣殊更に主張する處は本文申上候通之朋黨を一局に集め十分權力を振候見込に候にて左院等之局を廢候趣意には有間敷歟右様朋黨一局に相集候時は一昨年來之不平を含み輕々民撰議院論等初め其他種々申立實に不可言大害と可相成哉佛國轉覆は人民自主自由論を來し而遂に共和政治之大暴政を發し般鑑可恐と奉存候何分共々御參考之萬一に相成候は、本懷此事に御座候何角御直に申上度候得共當今嫌疑も不少光景に付屢參殿も差控申候御用捨被爲下候也不備

本文御一覽後早速御丙丁願上候也

(參考) 佐々木高行書翰案

岩倉具視宛 明治八年三月廿九日

然ば昨朝拜謁委敷申上候元老院尙又密に承候處同院へは勅任官相勤候面々出仕被仰付候御章程の趣にて尤も 天皇陛下の思召を以て被仰付候と有之趣同院へは如何程權力御與へかは存じ不申候へ共實に重大の御設にて則ち國家の柱石と相成候義にて歐米洲とも其人撰は自ら鄭重又は役筋家筋等を相用候と相見へ申候因て只今元老院御設に候へば先以皇族華族の中六七名士族の中六七名御一新の際有功の向并有徳有學等にて天下にて許す處の人柄有之候は、兩三名彼是貳拾名許も御登用相成候様願度候方今直様勅任官一度奉命致居候向御登用相成候時は差向き副島後藤由利井上福岡陸奥島本樺山鳥尾等出仕可相成其他老功にては岩下とか齋藤とか御登用可相成候得共全體は一昨年征韓云々不平黨又は昨年臺灣事件不

平黨にて平素の見る處は各々可有之候へ共概して申立は一昨年大不平を鳴し局外にて騒ぎ立候さへ廟堂上御苦心被爲在候程の朋黨連にて其向の方多く御登用相成候て大權を相授けの時は行政上忽ち御難澁と相成り弊害の生候事眼前と奉存候成る丈議員は御減少にて御設け相成左院も昨日申上候通御存在にて屹度行政上の御顧問備候義御肝要と奉存候第一左院章程權限の處極御大事と奉存候右邊所謂釋迦に經文に御座候得共弊軀煩慮不少より前後不顧無遠慮に申上候段御海容願上候也頓首敬白

三月廿九日

高行

岩公閣下

二白 昨日出仕にて尾崎三郎より密に承り候得ば同人より條公へも伊藤へも申出候處條公には篤と勘考の上閣下へ御内談可致被仰聞伊藤は全體左院は存在致度見込なれ共何分板垣邊殊更に主張致し候間一步を

讓候此の上大臣公方に御議論有之候はゞ其節は見込も十分申上候心組の趣伊藤の口氣にては四參議全く同意にても無之光景右板垣殊更に主張する處は本文申上候通朋黨を一局に集め充分自分共の見込の如く權力を以て相運ばせ候策にて左院等の局を廢候趣意には有間敷歟右様朋黨一局へ相集候時は一昨年來の不平を以て輕々民撰議院を相立候見込にて如何程の大害を醸し候も難計佛蘭西の轉覆は人民自由論より來たし遂に共和政治の大暴政を廢し今日迄其の毒を流し、事は皆人の知る處なり般鑑可恐と奉存候何分とも御參考の萬一に相成候はゞ本懷の至りに奉存候御直に申上度候へ共方今高行は嫌疑有之候趣に付屢々參殿差控候且條公へは尋合も御座候はゞ御申上願上候也

一三 岩倉具視建白書

明治八年三月

臣具視天性迂拙以て叨りに大任に膺り重職を奉する于茲八年其間萬機補

賛するに足らず

聖意對揚する能はず失錯の責は枚舉に遑なし就中客年征蕃の擧たるや止を得ざるに出つると雖とも抑其當初太政大臣は病に罹り朝せず左大臣は未だ置かれず都て臣首唱となり區畫其宜を得ず當時前途の成敗豫め知るべからず上は宸慮を惱し奉り下は人心をして洵々たらしむ幸にして陛下の稜威と使臣武官の盡力に由て一旦其功を奏すと雖とも得失以て償ふに足らず之を要するに罪臣か一軀に在り假令天恩無極を以て臣か狂愚を憐み寛恕を賜ふも臣か鄙衷一日も以靦然徒に其職を辱しむるに忍んや伏して願くは速かに臣職を解き明かに臣か罪を鳴責せられんことを誠惶誠恐昧死再拜

明治八年三月

一四 黒田清綱書翰

岩倉具視宛

明治八年四月十三日

下官儀

本日午前八字より九字迄に可能上旨御請仕居候處差掛急用出來近頃恐入候得共午後五字々六字迄に參上仕度候間此段相伺候板本公使より之電信等は拜見仕候處早速公使見込通に取計可申様御電報有之方可然哉と奉存候早々奉酬

四月十三日

黒

田拜

岩倉公閣下

二伸 別紙電信書條公御書狀及ひ寺島參議書狀返上仕候也

不審之廉々板本公使へ問合に及候處右往復電信別紙之通に御座候間入御覽候也

四月十三日

岩倉具視關係文書第六（明治八年四月）

寺島外務卿

三條太政大臣殿

四月九日寺島外務卿を榎本公使の問合せの電信文

クツルを不殘取るときは外に代りの物を望む事できぬや又我よりはカラフトの建物の價はしらせさりしや

同月十一日榎本公使より回答之文

最初の御問合せの箇條の義は既に頗る議論を盡したる上の事なれば外に方法なし又第二の箇條は彼の方に於ては建物殆んど價なきに似たり左れとも其事につき近き内報知あるべし左なくとも日本政府に屬せば毎年税を出して其建物を借りたしと我に願ひ出たる儘なる亞米利加人あり

一五 岩倉具視書翰〔三條實美宛〕 明治八年四月十四日

昨夜柳原入來久光方内情共段々承り候別紙も右之末に付今朝拜上得と可言上存候處九時御參之由故小生も同時參朝可申伺候

○昨夕川路來り井上事云々類に申來候事

困り切たる者にて候御注意無之は不相成と存候

○久光方召に付ては其人體侍從以上可然か只一書の召にては六ヶ敷次第有之候事

萬拜上可申上候得共一筆申上置候勿々以上

四月十四日

具 視

三 條 公

別 紙 寫

復古の鴻猷を開き立縣の治體を定め八百餘年不反の大權始て朝廷に歸するは列聖の餘烈と雖とも汝久光賛襄の功居多なり朕爾來善後の政を舉げ闔國一致富民安邦の基を立て又外國の美事良法を參酌せんと欲し前年右大臣を同盟列邦に巡聘せしめ其宜きを考案せしむ如何せん在內遣外の重臣氣脉不通或は新政を施行するの際輕舉順序を誤り朝令暮改不少殊に昨年内外不綏兵革交起る嗚呼是誰の罪そや朕反躬して自責せずんは非す今や誠に宜く内政紀を確立し外交際を整理し億兆を保護して國家の治安を定むへし汝久光先帝の貽臣朕の股肱也老たりと雖とも病を扶け朝に參し朕か不逮を輔け前途の大計を闡し嚮に鹿兒島行在に於て汝建議の各條全く至誠の衷情に出つ朕之を採擇す若其施設に至ては太政大臣右大臣と協議以て聞せよ

一六 德大寺實則書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年四月十四日

本日午後一時左大臣召之處病氣不參御届相成候に付條公に申入候處更に萬里小路大輔御使として明日午後一時所勞相扶け參 内候様被仰遣候間此段及拜啓候也

四月十四日

實 則

岩 倉 公

一七 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年四月十五日

御安全奉賀候然は 尊臺御進退之儀 勅諭も被爲在候上は速御出勤被爲有候様只管企望仕候抑今日之形勢上下注目物議恟々之際に付高官重職之者一日之舉動大に人心に關係し動もすれば疑案百出隙を伺ひ鼓動せんとするの景況に付御所勞にても御引入は甚關係する所不少候間國家全面之處に御注意被遊少く忍ひ大を謀る之時と御憤勵吳々天下蒼生之爲に渴望

仕候仍愚衷陳述仕度乍荒涼一書呈上仕候可然御諒察奉仰候拜具

四月十五日

實美

岩倉殿

二伸 元老院人員今日被仰付候間此段御承知可被下候也

一八 佐々木高行書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年四月廿二日

謹而奉言上候陳者元老議員御人撰自然漏洩致候哉世上物議も不少趣追々承込候義も御座候處今般元老院被爲立候御義は不容易重官に付御人撰は天下有志輩屬目する處に候得は實に以御大事は申上候迄無御座候得は御情實を御人撰不相成義は信用罷在候得共若哉世評を通り御情實を以御人撰相成候而は天下億兆之人心に相關候も難計と僭越ながら深く痛心仕候併しながら此上萬々不被爲得止御儀も御座候得は一の姑息術御施行被爲

在度候右姑息術者議員を三等に相立一等任職之向は一等議員二等三等准次に被任可然歟と奉存候御體裁上を見候時は元老議員に等級有之候者不都合之様に候得共今日適宜之御處分も亦御肝要と奉存候天下人望も無之向迄一時に一等官に被任其月給は三等の給を下賜候と申様に而は官等之貴き今日之地を拂ひ遂に當今之位階之如きに至候は顯然と奉存候昔し舊藩に而山奉行久敷奉職功勞之者有之執政より物頭に進級致度段申立候處土佐守曰く物頭は數拾人上に立つ地位に候得は猥に授くべからず百五十石知行宛行べしと命じたり此事一小藩の處分なれ共其位階等級を容易にせざる事良策と奉存候況や天下の名器に候得は萬々御秘藏被爲在度候日支沿革に而も爵位を輕んずるは必衰世之跡史藉上昭々と相見へ候孔子曰夫れ名と器とは猥に人に借すべからずと深く御感味被爲在度候右様之義申上候も恐縮之至に奉存候得共平素之御懇命に任せ例之兪暴を顧みず言上仕候御海容願上候御高覽後御丙丁被仰付度候也

八年四月廿二日

頓首々敬白

岩 公 閣 下

高 行

追々參 殿可申上候得共御多忙中且御時節柄旁乍失敬寸楮を以申上候
段不惡御聽取被仰付度候也

一九 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治八年四月廿二日

今朝は御細書何も令承知候扱今度御改革上の事に付段々御配慮御申越の
旨趣勿論御同意盡力致度候へ共先日病氣ひたと引籠居候に付如何とも致
方無之不惡御承引可給候此御文通の義素より御内々の事に候へ共決て御
洩し無之様願上候草々以上

四月廿二日

具 視

佐々木高行殿

二〇 岩倉具視書翰〔佐々木高行宛〕 明治八年五月一日

小南の事跡月中云々御内話何も承知の處少し調濟不相成廉有之少々延引
候間此段御心得迄に申入候早々以上

五月一日

具 視

佐々木高行殿

二一 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年五月一日

彌御清泰奉賀候然に肥後人津田精一清國にて奉職之儀云々申上候處段々
御念示奉畏候尙元田永孚入來候得は巨細面談可致候將華族會館一件條公

岩倉具視關係文書第六 (明治八年五月)

二百九十五

より木戸伊藤兩參議へ談示濟之趣に付尙又下官事一昨夕島津左大臣に面
晤及相談候處同公惣亦無異議候本日は條島二公は御會合哉に致承知候間
何卒尙又御熟談速に御決斷被下其段鳥渡下官へ御報知相願候左候得は清
書致し下官惣代として會館役員へ談合致し金子及辨駁書已下相渡し可申
彼方にてても在官華族の議論躊躇を遅待致し居り候哉に承り候間可成本日
御決斷相成候様御鼎力奉願候要用耳頓首

五月一日

前 光

右 府 公

侍史

二二 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月二日

略文高免

今日左府入來面晤仕候處入來之趣意は過日差出置候書面之御答速に御沙汰相成候様只管依頼に有之右書面に御返答御六ヶ敷候は、唯辭表に書替可差出若亦急速御沙汰無之は別に保養之爲め御暇願書可差出との事に候序に色々談試候處羅紗製造等之事に御所詮出勤被致候様之口氣に無之候服制之義は唯輸入品に無之は宜との事に無之直垂體之服制に變換之趣意に有之候尙明朝篤と御談可申小生も態々此節勅命を含み御使に行向候上は君命を辱しめ世上の誹謗を來し候様之事有之候亦は決亦不相濟と存候間十分成功之目的無之亦は御使に參り候事も難致存候

草々拜具

五月二日

實 美

巖 公

一 既往を鑑み將來を慮り元老大審の兩院を設立し太政官の章程を改正す
汝久光先帝の貽臣朕の股肱也因元老院議長に兼任せんとす宜く病を扶
け朝に參し勉勵以て朕の不逮を輔けよ
一 汝久光嚮きに鹿兒島行在に於て建議する各條其誠衷を嘉みす第三條を
除くの外朕將に之を元老院會議に附せんとす
一 服制之儀は時勢を斟酌し之を制定する所にして且前日我使節歐米各國
に於て既に之を用ひ各國人も亦我禮服たるを知れり今俄に變換せん事
朕甚不可とす然れとも其品多くは輸入に係る將來の國計を憂ふるに至
ては尤注意せざる可らず依て其制を全國一般に及ぼすに至ては必しも
迫促を厚せは且らく其便宜に依らしめて可ならん陸海軍服等の如きは
到底毛織を用ひされは其便否利害亦言を待たす故に内務大藏工部等に
旨を下し不毛の地を開き牧羊の業を創め隨て毛織製造の器械を置き以

其用に充んとす

一 太政大臣を経て奏聞せし處の密表朕收閱すると雖も俄に之を答ふるを
得ず

昨年來御建言の儀に付御答可申入旨御示に付兩人之意見別紙を以て御答
申陳候尤此上之御取捨は惟
宸斷に可有之儀と存候間御直に御奏聞
叡慮御伺相成候様可然存候一般建議とも何分輔翼總判御同職に奉務被成
候老臺之御建議に付於拙者共決判仕候儀難致候間尙御同然熟議を盡し
宸斷を仰之外無之候

但前年 御巡幸之節御建言の箇條は自ら二十ヶ條中に相籠り居候様存
候間別段御答不申候

第一條

別紙御答議有之候

第二條

舊曆は太陰を推算し一年と定めたる者にして數十年間數日の差を生ず是舊來數々曆の改正ある所以にして必竟東洋國の曆學未だ精微に至らざるに由る今太陽曆なる者は太陽の躡度を推歩して以て一年を定む三百六十又五日を以て四季と爲し四年に一日の剩を生ずるのみにして數百千年を経るも換易せず最も其精を得たるものに候是粗を捨て精を取の儀にて外國の正朔を奉する譯には無之候

第三條

我邦從來朝廷の大禮典には必ず立禮を爲し胡床卓子等を用ひたり席上に着座するは中古以來の風習に有之候今玉座を始め諸官署に至るまで椅子卓子等を用ひられ候は全く彼の便法を取り時勢適宜の事に可有之

候

第四條

西洋各國の美法良制學術伎藝を御採用に相成候上は必ず其事に通達せる者を雇使せざるべからざる儀にて更に國體上に關係候儀には有之間敷候

第五條 第六條

其實否を審明にし黜陟を行ひ度事に候猶御聞見の事等有之候は、委詳承度候

第七條

兵卒は操練并に護衛の外猥に君邊に近つき候儀は無之候猶御所見有之候は、詳細承度候

第八條 第九條

各自に其品行を修め其心術を正くすへきは人道の常に有之政府の命令

を待たざる事に候苟も國の法憲を犯し候程の者は自ら定律ありて之を罰する勿論の儀に候得共左程に至らざるものは官より罰するの譯にも相成間敷別に懲誡の方法有之度猶御論承度候

第十條

西洋各國學問の道次第に開き進み隨て其規則も善美を盡し其主とする所は専ら實用に適するにあり我國従前の學則の如きにあらず今日實材を育成するの際其學制固より各國の善美なる者を選択折衷せざる可らざる儀に候猶良法御意見等有之候は、承度候

第十一條

別紙に御答議有之候

第十二條

方今銃砲の技盛に行はれ野戰攻城總て擊劔を用ひす且士人劔を佩るは封建の餘習に候今國法ありて人を毀傷する者あれば官之を罰するあり

今更擊劔師を命ずるには不及事候

第十三條

西洋各國兵制具備精美を盡し以て法と爲すに足れり今之を用ゆるは固り時勢適當の儀にて國家緊要の事と存候

第十四條

別紙御答申候

第十五條

無用の冗官之を沙汰すへき勿論の事に候實際上御所見承り御談し可申候

第十六條

防禦の策御高論承度候

第十七條

各國交際を開かれ候上は各國人民互に親信を通するは固り天下の公道

に有之候へは通婚候とも之を禁止する儀は勢ひ相成間敷存候

第十八條

神祇官教部省の儀左院の建議も有之猶御評議可相成候今日の官制既に司法あり警視あり別に彈臺を設けさる至當の事に存候猶其得失利害御意見有之候は、承度候

第十九條

前年既に内務省を被置従前大藏民部兩省の事務を分轄相成候

第二十條

我邦半髮搥髻等の俗は畢竟亂世の餘習にて固り古昔の風と云へからず士人の刀劔を帶るも元と兵役の常職あるを以ての事にて其常職を被解候上は徒に其武器のみを帶ふる理は有之間敷今日散髮廢刀等の事は時勢當然の儀と存候

別紙答議

禮服復舊の事

凡そ國家の典禮時に從て沿革する古來有之事に候禮服の如きも今日歐米の風を斟酌するは猶往事隋唐の制に模倣すると同様の儀にて苟も取て之を我に用る時は即ち我服なり必しも洋服と謂ふ可らす但し其之を革むる稍々早に失するの嫌なきにもあらざるへし乍去世態の移換する人情の趨向する到底變革せざるを得す尤も格別に不便不都合の所有之候へは之を改正すへきは勿論の事なれとも既に御改定に相成候儀今更復舊候は不被行事に存候

税法復舊の事

收税の法中世以降陵遲紊亂し國其法を異にし藩其制を擅にし輕重厚薄其均平を得ざる事甚く相成來候廢藩置縣の今日に至り候ては一般均平に歸せず候ては不相成儀にて前日税法改正の詔を降し玉ふ所にして各地方官

の専ら着手に汲々たる所以の事に候一定の大法相立候上にて其得失利害を講究し其細節目を改正する亦不可欠事に可有之なれとも全故制に復するは却て人民の不便と相成不可然事に存候

雜稅新規の分を免する事

士農工商の論なく一般政府の保護を受くるや政府の諸費を購ふべき固り當然の義務政府の之を收むるも亦當然の權利にて是萬國の通義に候今之を従前の如にせは公平の當を失ふのみならず國計上恐くは關係の大なるもの可有之但し其苛酷細瑣の弊あるものは之を削除するも可然事に候既に今日數十の雜稅を廢し更に新稅を興され候は此御趣意に候

違式註違中苛酷なる者を除く事

御同論に候實際箇條に當り御示し可被下候

兵士復舊陸軍を減する事

封建の制を變して郡縣の治と爲す亦時勢の然らしむる所今日に在て不可

と謂ふ可らず既に藩士の常職を解くや全國の人民を以て全國を保護するの責を負しむる固り當然の事即ち徵兵の令出る所以に候且従前の藩士たるもの未た必しも盡く勇強ならず今日の平民たるもの未た必しも盡く懦弱ならず兵の強弱は之を訓練する如何之を鼓舞作興する如何に在るのみ是亦施行早に過て稍人情に適せざる儀は可有之なれとも兵制宜を失ふにはあらず固より今日國家を保護すべき丈の兵備は無るへからざる事に候猶増減の儀實際上に付き御所見も有之候は、詳細承度候

海軍を盛大にする事

御同論に候國力と會計とを酌量せざる可らざる儀と存候尙厚く御談し申度候

不急の土木を止る事

御同論に候昨冬既に不急の土木興すべからざる令あり乍去不急に似て其實は不可止も可有之實地を考察し着手の緩急肝要の事に候猶實際上御所

見相承御談し可申候

皇居早急造營の事

御同論に候但其造構一概に西京の舊式に依據候儀は自ら時態の移換に従ひ改め易へざるを得ざる事に候

二三 柳原前光書翰「岩倉具視宛」 明治八年五月四日

本日毎度拜趨辱高誨感荷候儀其候蒙内諭候密書起稿奉覽候尙可然條公へ御示談希望候原稿一通返上候先は早々拜啓頓首

五月四日

柳原前光

右大臣殿下

(参考) 左大臣へ内敕通達大略

明治八年四月左大臣を皇居へ被召前年鹿兒島にて建白之條中服制は斷然不採用其他は尤の儀に付元老院の議に付し採擇可被爲在親諭之處服制の儀眼目樞要にて且前途國計にも關する重事故右御採用無之は奉職目途無之就ては先是太政大臣へ差出たる密表御答願度御前にて勅答之事

一右都合に付御煩慮被遊内旨を以て太政大臣へ爲勅使左府亭へ可行向御沙汰も被爲在候得共自然談論不熟ては不都合に付柳原前光をして先其地歩を作り懇談可致爲め三條大臣より傳命之事

一五月六日柳原前光左府亭へ行向内勅相傳及懇談候處尙考案可及返答旨被申候事

太政大臣より柳原へ被内示覺書

一新に元老大審の兩院を被設太政官章程改正被仰出就中元老院は議政の要路たるを以て島津左大臣へ議長兼任の思召に付病を扶け朝參有之候

様叡慮の事

- 一 左大臣前年建白之儀は全く至誠の衷情に出候事にて其内前日御親諭にて尤と被仰出候件々は元老院の議に付し上奏之上施行被遊へき事
- 一 過日奏上相成候密奏は既御收閱被遊尙御熟慮可相成事
- 一 五月七日左大臣より柳原へ書通にて昨日來訪懇々の明教蒙昧を開き就て夜來徹曉熟慮に及候處何分一ヶ條御採用無之上は先般玉座下にて敬答申上候次第も有之御請難致并に密奏御答期限之五日中の儀條公へ先般如申入取消難成被申越候事

密奏は聖上御手許に有之故期限難定
五月八日條公より左府へ書通之事

- 一 柳原へ左府書通之儀に付條公より内奏の處服制之事時勢を參酌し被仰出候處輸入之物品を仰き内外貿易の不公平を生し遂に國計の不足するを憂へ前日左大臣建言の儀は尤に付尙御熟考可被遊御内意御決定の事
- 一 右服制の儀に付御熟考の情實五月十五日柳原左大臣亭へ行向演述候處

此上は兩大臣と誠心協議を遂げ且議官人選之儀異議有之間談示致度被申聞候事

- 一 五月廿一日太政大臣より左府亭へ被行向協議懇談に被及出仕被促候處尙深慮可致被答候事
 - 一 五月廿三日左大臣より左府亭へ被行向協議懇談に被及出仕被促候處尙深慮可致被答候事
 - 一 五月廿九日柳原三條の使として左府へ行向熟考之景況相尋候處何分至急決答難致被答候事
- 但大臣中にて協議難整且議官新任之節左右大臣共檢印無之内勅被授候云々の内情被申居候事

(右柳原自筆)

二四 三宮義胤書翰「岩倉具視宛」

明治八年五月四日

拜啓彌御無事御奉職爲國家敬賀此事候當地龍若公原保太郎何れも無事勤學御掛念無之様奉祈候近日來當地公使館在勤元野某歸朝に付定る同人口頭より委細御承知も可被爲在と奉存候龍子も當節はヲクスホヲド大學校に在頗る勉強更に一點是を咎むると云事無御座是亦御放念可被爲在様祈上候世上の風評は縦令同公の事に付如何様有之候共必ず御掛念有之間敷實は上野公使杯も當地に來り實地之模様を見聞し日本に在若公の評談を聞しに違ひ各別是と申事はなしと申居候自然間違等生し候は、原保太郎も滞在必ず汚名を流し候様の事は爲致申間敷同公學文は順を追進昇致し候

近來は木戸板垣の兩氏も復職有之由必ず一段取詰り諸事平謐に至るべくと刮目罷在候兩氏を引出すに付大久保氏大坂に出張し親く面談ありしと拜承す實に大久保氏の威燃を不振反て自謙して木戸等を引出すと云事は中々常人の容易に難被行事跡尙々感佩仕候當年は年も變り昨年の如き大

難事の生せざる様諸事親く廟堂の議相決し候様希望に不堪

扱先般言上仕候通り青木周藏が野老身上之事申立候は、何卒一日も急速に御取計被成下候様拜願仕候青木よりも野老より老公に迫れと頻に申越し候御多用の公事中右様の義申上候義死罪難免恐入奉り候

當歐洲も各別相變候事なし然し此節米人ボヲートン氏當英國に來り日本に稱するゴムと云ものにも奇なる衣服を作り出し候此れは水中に在苦なく身體を浮ばせる服なり二週日間同人右の服を着し英國のトブル港より佛國の港カリインに渡り申候此節は同人水中に浮び居りし事十五字間なりし實に大業を成就せしなり此節新聞紙に云く同人發明の服にて此後數萬金の金持と相成るへしと云へり○一周日間前には佛國にて風船に乗り込大空中に飛上りし處余り登り過ぎて空氣のなき處に至三人乗込の中貳人は即死壹人は無事に在下れり是れも必ず不日工風を盡し他日には必ず大業を成就するならん實に歐人の元氣の盛なる感するに余りあり今よ

り五六十年后は空中を自在に飛び水中に没しても没死の患なく終は東方
アシア洲より風船に乘し水中を歩き歐洲に運行する期來るも難計實學文
究理の開けしかは恐るへし亦た工風を盡不能の事業を試る恐るべし唯恐
るへきは學文と人智に御座候申上度如山難盡紙上尙后便に言上可仕候草
々頓首謹言

五月四日

三宮 義胤拜

岩倉老公殿下

二五 三條實美書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月五日

御安全奉賀候然は島津一條如何と柳原之都合渴望仕候左府之處も五日中
之約束に候間何分にも至急相分り候様譯る御配慮奉願度候仍此段申上度
如此候也

五月五日

實美

巖公

二六 柳原前光書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月六日

御勝常奉賀候然は左丞相公より本日午後二時より參殿可仕被命拜趨候此
段任御約束拜啓候也

五月六日

柳原前光

右大臣殿

二七 小河一敏書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月十二日

御系圖調宮内へ被附候は、手細にしても工合よき仕方可有之と愚考仕置

岩倉具視關係文書第六 (明治八年五月)

候得共尊慮之如く御系統を修史之大眼目と可仕候は、是迄之面目を一洗して體裁可被立候就、是過日も申上候通副島氏を副總裁に被任度候其義不叶候は、大木司法卿に兼任相成度候惣括迄に候得は平常修史局に出仕に不及兼任たり共さまで繁劇を増候には無之間此段御盡力奉願候萬一同氏不得意に候は、私に御内通可被下候忽申解方可有之候扱是迄御系圖調は局中にて一贅物の如きあしらいに御座候御系統しらへを大眼目と可被立候は、章程大に改正不相成ては不叶候付ては鄙見も有之候尤總裁副總裁を被任候は可然之至極に候へ共其餘局中之官名改り又は人員進退及び章程之事は一切御着手已前に必々鄙意御聞取奉願候抑先般重野より大久保卿へ入説長々木戸卿へ入説にて歴史課を修史局と改名長松重野を局長副長と被任候て近日長松重野が久保卿と土方等へ段々申談之様子に候副總裁人撰等其外料理悉く出來之上大臣方入御覽候て不可動之勢に成候様之事共にては不都合之極に御座候右はあまり之申上分と恐入候へ共式

部寮を宮内省に被附候義少も御承知無之との御話も被爲在候へは爲念前件之旨申上候誠恐誠懼謹言

五月十二日

小川一敏

右府公

二八 伊藤博文書翰

〔岩倉具視宛〕 明治八年五月十九日

式部寮宮内省へ被附候儀に付御懸念に被思召屢御教諭奉拜承候處博文は更に御不都合無之事と奉存候昨日木戸へ御下け相成候英國其他の諸國君主之教宗を崇信し議事開院等に僧侶の出席を要する等之儀有之事を御引例相成候へ共是は全く異なることにて式部は神官僧侶と違ひ天皇陛下の祭事を取扱候儀にて宮内に屬すると不屬には關係無之事又式部の在る所に因て祭典を輕重するの議萬々無事と奉存候尙御再考奉仰候

拜具

五月十九日

伊藤博文

右大臣公閣下

二九 青木周藏書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月廿日

略啓

時下益御機嫌克御奉職被爲在重疊奉恭賀候

本年二月以來坂地之會議云々日誌上に承居候處無間木戸板垣之再勤隨
而左院御廢止新兩院御設置等之公信速に到着仕申候尤右御變革之近因并
に兩院之權限等は今以一切承知不仕候得共兼而御高案被爲在候通り右之
御一舉に而聊に而も政規之基礎被爲在候は、國土人民之爲大幸過之もの
無御座候愚案は兼而辱知被爲在候通以政規爲政治之主意に御座候間支梢

に流候而も有刑典而有刑罰之流義に而御座候北白川宮殿下御義昨年獨逸
帝の御面會後は當國皇族一統より特に丁寧之待遇有之毎周一次或は兩回
朝廷より致招待申候且本月初旬より皇帝特別之許可を以一般調兵之法方
并に野外練兵等之式まで一々令教授候處普國并に各國王子との御交際は
勿論上等士官等とは日々御往來被成候に付堂々一皇族之御面目故莫大之
御雜費有之申候尤最初より御切儉可然段毎々申上置候間爾他王子各國より
候王子は一ヶ年少くとも五萬圓位は所持仕候中等の比に而は無御座候得共到底
エチプト國之王子は馬十匹僕六人程も抱居申候即今之御定額に而はと而も長く御留學難相成而已ならず御切儉之末御住
居御時服等餘り疎略に相成候而は世間之御交際も不相成隨而我皇家之
御不體裁と可相成奉存候兼而德大寺卿より内諭有之候間宮殿下學資は下
官預り居候處今月初旬より御調練之爲買入候馬一匹之價五百圓御軍服代
二百圓餘大隊附士官招飲之代價六百圓他國之王子調兵練兵に參與するときは大
隊附之士官六十人は是非共可招飲土風に座候合せて壹千三百圓之高頓に仕拂候程之掛に而御座候間御定額之七千

圓にあらはとも長久之目途相立不申候然ればと急々御呼返被爲成候は獨帝之好意に逆ひ此亦御不都合之御義と奉存候就るは爾後如何取計可申歟此段伺尊慮候間至急御返答可被爲下奉願候宮殿下御留學可被爲成との御事に御座候得は壹ケ年二萬圓餘御差立被爲下度奉存候猶今年下半年之御學資を至急御贈致可有之宮内卿に御申傳可被爲下入に奉願候先は右内啓仕度御伺旁如此に御座候恐々敬白

明治八年五月廿日

青木周藏拜具

岩倉右大臣殿下

三〇 小河一敏上書

岩倉具視宛

明治八年五月廿一日

乍不肖勤王之志有之御一新に相成真に手之舞足の踏處を知らさりしに豈はからんや今日のさまに立至候は心外無申計候富國強兵は治國之要なる

に今日は貧國弱兵と成候其概略を申候得は近年外國に膏血を被吸候は凡壹億萬圓已上にして國中は紙幣計に候是國は貧しく成たるに候又海陸軍兵隊ありといへ共節義の心すたれ候へは兵弱く成しといはさるへからす扱人々自ら信しみつから恃む處有てこそ國は立申候今の世上下一般信する處なくたのむ處なく人々自己一分之に利をのみ心にかけて候は淺ましき人情に成降候此病根いつれより生候哉乍憚深く御考量御自反被爲在度奉存候扱神祇道は皇國第一に重すへき事なるに今日に至候ては御一新前よりは其道遙に衰へ慨歎之至に候貧國弱兵人情の破等に付挽回之愚考も候得共迎も御採用無之と暫口を閉申候唯神道興隆之件のみ申上候追々申上候通副島氏は兼々神祇尊崇之處去年來は神祇道大に研究其進歩大方ならぬ事にて眞に幽理に通し不可思議之事共不少候此義は迎も筆紙に難申上候今日神祇道興隆之事御委任候は空海の眞言をひらき候よりは遙にすへみ可申候間速に教部卿御擢任之義奉仰候もと文部をも被兼へき事

と奉存候くと、敷は不申上只右計申上候將又宍戸大輔不體裁之事は承て耳を驚かし候委細はわさと不申上候初は常世長胤などの説のあはぬよりの申分かとも考居候處中々左様には無之候もし此儘被差置候は、黒田も辭官之外有之間敷左候は、皇國の神道も是かきりと奉存候爰に至候は、罪は誰に歸し可申哉大臣方之罪といはさるべかららす仍之忌憚を不願此段言上仕候誠恐誠懼謹言

五月二十一日

右 府 公

小 川 一 敏花押

三一 岩倉具視書翰「上野景範宛」 明治八年五月廿二日

皇上益御機嫌克被爲涉候國內平穩御放慮可給候足下愈御安康御奉職珍重に存候然先日鹽田三郎洋行之節巨細及御依頼候通次男具經義愈當冬鹽

田歸朝之砌同伴歸國之義決定候條萬事宜敷御世話被下度候路費之處此度爲持上候様申置候處文部省にて承り候得は一旦官費生徒之向き私費にて留り候共歸朝路費だけは各公使館に渡し有之候趣に付別段不差出候乍去萬一間違等も有之候は、早速御示可有之勿々可相廻候從今時間も有之候義に付往來可相辨存候得共若鹽田同行之節間に合兼候節は一時御取替置可被下候様分御願申入候將又當何月か來十二月中半年分學費金何百何十圓即今便爲持上候乍御世話御引受被下月割を以て月々御渡し可被下候最早暫時之留學には候得共寸時も爭候勉學中之義不相替御教諭深謹慎出精候様御加鞭之事吳々御頼入候仍勿々如此御座已上

五月廿二日

具 視

上野景範殿

追々四月には御改革有之元老大審の兩院を被置木戸板垣後藤始にも復

職都て平穩御放慮可給候尤例の世説は喋々有之候得共格別の事にも無之定て新聞上にて種々御考慮と存候に付一筆申入候將又支那雲南にて英國士官殺害之義に付兩國間不容易義出來哉も難計風聞尙眞說御漏被下度候勿々已上

十二月廿二日正月廿一日兩度之發翰披閱海陸無御異狀御着英爾後御壯健御奉務之由降念す獨佛間之珍事御聞せ驚申候扱豚兒之事御着後厚く御注意被下候所兒之心得違のみならず自然惡風習による所も有之趣懇々御忠告も被下且轉地留學可然歎之高案深く御配慮千萬忝存候御書意にて一應安心致候然るに更に見込之事も有之候間此度必歸朝候様申遣候間猶又當人へも御諭し相決候様御取計被下度頼入候時季御保護御奉職是祈頓首
上野景範殿

三二 朝彦親王御書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月廿七日

今般一家御取建賄料御増加殊に

仁孝天皇御養子に被復親王 宣下并邸地稱號迄拜領於朝彦深重畏入候右御禮紙表を以申入候也謹言

明治八年五月廿七日

朝彦

岩倉右府殿

三三 小河一敏書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年五月三十一日

一昨日は大事件主となり教部之事はしみく言上も不仕候尙其後重々及探索候處三條公に本願寺之徒浸潤し奉り宍戸大輔其意を一圖に循奉其大趣意は淨土眞宗あみた佛程 皇國之人心に染候ものは無之是を以ては洋教にも立ならひ可申候神道の如きは一つ之祭式に供せんのみとありしを

教部省中にて黒田三島のみ是に抗論して是迄取續居候得共何分にもし
ぎ難く依之副島御推任か其義不叶候は、宍戸を元老院になり轉任之義盡
力之者も有之候得共其義は迎も不叶候其子細は丞相公と木戸參議と宍戸
を御ひいき強くとても副島御推任も宍戸を付る事も不叶此段は絶念候様
大久保卿の御内意有之たるよしにて三島も脱然酒田縣へ派出いたし常世
長胤は昨日辭表を出し黒田も不日に大輔と手詰之一議論之上にて辭表之
かくごと被察候然候は、教部も神道事務局も是限に御座候其如くにて尙
宍戸に御委任置可有之よりは速に教部を被廢山陵と社寺之事を内務へ被
付候方遙にまさり可申候間急に黒田を被召委細之事情被聞食候様重々奉
懇願候其上にてとも角も速に副島氏を御推任か宍戸を免職か轉任か夫も
不叶候は、早々教部省を被廢候様三策之中に至急に御決奉仰候明後二日
朝參殿可仕其砌拜謁相叶候は、尙可申上候得共不取敢此旨申上置候御勘
考之上速に黒田を被召具に被聞候様奉存候恐惶謹言

五月三十一日

小川一敏

右府公

追々申上候過日修史局長長松重野より建議は至當に可有之候得共惣裁
副惣裁之御人品により向後之運歩之處に大なる相違を生し申候間此段
は宜敷御照察奉願候
局長の申上候通一日も早く御系圖しらへのもの共を内閣か願くは、御
前に被召委細を被聞食速に、叡斷相成候様吳々御盡力奉仰候誠恐謹言

三四 青木周藏書翰

「三條實美・岩倉具視宛」 明治八年六月二日

前略内啓

時下益御機嫌能被爲居候御義と重疊奉賀候然は先日右大臣殿の拜啓仕置
候通北白川宮殿下御義昨冬當國帝の御謁見之後は皇帝并に皇太子特に殿

下を親愛いたし度々朝廷に致招飲候而已ならず殿下兼兵學御修業被成候に付今春來殿下を親兵中之大隊へ編入いたし上等華族之士官を以練兵之作法等別段に令教授申候然處皇族并諸王子と之御交際日に御手廣く相成候間從前被爲差立候定額之御學資に而は往き長く御留學難相成而已ならず現今の如く質素に御身持被成候而は景況立君國之「プリンス」に相當不仕隨而御國并に殿下之御身に取候も御不都合之廉々不鮮親驗目撃之際下官義も毎度汗背仕申候就而は非常之思召を以殿下之御學資更に御加増金高は先日右大臣公へ申上置候被爲下間敷歟右様無之候而は御歸國之外別に手段無御座候得共獨逸帝之好意先日國帝より下官への囑に北白川宮殿下晋兵隊の御加入有之之喜は勿論兄之皇帝陛下も嚙々御満足に被爲思召候半抑々兩國之皇族を不顧俄に如斯親切に御付合いたし候義は兩國交際之彌々親密に可相成證據なり御呼歸被爲成候義は決而宜敷御都合とは奉存不申候猶歐洲に而は甲國之皇子王子等乙國に致旅行或は其國へ爲修業致滞在土人之世話に相成候節は甲國之君主より爲謝禮乙國之世話人の賞表等差遣候慣習に而御座候間

御國に而も賞表御施行之上は殿下へ致教授候士官等之相當之品不被下賜候而は御不都合之義と奉存候萬一賞表御施行無之候節は國産之品物に而然候得共此は御不經濟之極と奉存候當國式部頭は下官舊識之一家に可御座候處頻りに邦人の左袒致し且宮殿下には殊更懇切に御世話申上當朝に而大禮式之節は殿下へ位階等を示し御不都合無之様周旋仕吳候處先日「シユウエーデン」王來訪之節はとりわけ周旋仕候間此者并自他式部掛之兩三名にも前條士官同様之御謝禮有之度奉存候尤謝禮之義は決而差急候わけには無御座候得共氣遣候儘内々拜啓仕置申候先は爲其恐々敬白

明治八年六月二日

在獨逸

青木周藏拜具

三條太政大臣殿

岩倉右大臣殿

追啓 宮殿下御學資御増加可被爲下歟否千萬恐入候得共至急に御内報

岩倉具視關係文書第六（明治八年六月）

可被爲遣奉願候

三五 岩倉具視書翰〔朝彦親王宛〕 明治八年六月六日

今般御一家御取建御賄料御加増殊に

仁孝天皇御養子に被復親王

宣下并邸地御稱號等御拜領被遊候に付右爲御挨拶御書面拜讀敬承素り

叡慮に被爲出候御義恭悅之至に候仍御請迄如斯候謹言

六月六日

具 視

朝 彦 親 王

三六 岩倉具視書翰〔久我建通宛〕 明治八年六月七日

尊翰拜誦時下追日薄暑相催候愈御壯榮途上無異御着京遙賀候然先般御

滯京中御招請申上候處每次失敬而已畢竟貴君往年舊交の厚情を表する迄

にて何等之風情も無之然るを御懇謝鴈章領掌却亦赤面之至り小生を始め

愚息にも屢御招御厚情千萬感謝候將御家政向且賢息御身上御痛慮之趣元

々親子之間御尤之義小生にも尙尊公御心情斟量不肖應分心配可致含み候

寒暑未定之候貴重有之度公務繁劇倉卒概報御海恕是祈

明八 六月七日

具 視

久 我 建 通 殿

三七 香川敬三書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年六月七日

拜見仕候益御壯榮奉拜賀候然は

尹宮御一家御取建相成候に付通稱等申上候様御申聞拜承仕候右は過日一

家宮御取建相成久邇宮と稱號被下候事に御座候宮内省々相稱候時には左

岩倉具視關係文書第六 (明治八年六月)

三百三十一

之通

三品親王久邇朝彦

右之通に御座候

一昨日は御光來被下乍例大失敬御海容奉祈上候扱其節御申聞御座候件々
昨夕藤井少進方へ參り委細相分候間今夕にも拜參可申上候何も御心配筋
ほとこの事は無之候得共切迫には相違無之様子に御座候就るは御入湯一件
は如何と山岡も心配致居申候第上策は御辭職杯と申事無之一と先形勢を
御覽の爲御引こもりの方至極御良策と奉拜察候しかし昨日も申上置候通
り愚昧之勘考に決り御考慮の御一助にも有之間敷候得共知る不言は又
不忠と存心中申上候不惡御聞取奉願上候再拜

六月七日

岩倉公

敬 三

三八 花房義質書翰

〔岩倉具視宛〕

明治八年六月十五日

謹啓向暑之節御座候處益御清安御奉職被爲在奉敬賀候當地昨今漸く春色
野に滿ち候得共朝夕は尙外套を脱し得ぬ計りに御座候

一樺太一件は多年之紛論にて或は兩國之一大不幸を牽出し來るの源なる
へしと各國人も間々費神候程之事に候處此度まつ此大團圓之結局をな
し候は爲國家深く奉賀事に御座候尙此上とも千島の獵虎海豹は徒に他
國人の利益となさぬたけの奮發御國人民に起させ度且樺太之漁業も從
來之利益を失せぬ様引續き従事させ置度事のみ只管所祈に御座候是等
之事凡て條約ヶ條中にも有之尙榎本公使が言上之旨も有之遂に御承知
之事と奉存候

一「マリヤルズ」船一件も仲裁理否之決斷によりては御國之名譽に關し候は
素より之事に候現に人身自由の權理上に於ても或は進歩を碍る義も有

之へくとまで懸念致し候程之事に候閣下においても素より深く御掛念も有之たる事にて候ひしが是亦此度斷決相成日本政府一點の非なきに定り現在四拾餘萬之償金論を決して拂ふに及はざるのみならず日本の法律道義に基きたるを廣く世界に示すに足り法律の上に於て世界の信用を得るに於ても一步を進め得たる事と御國名譽之上に於ても當時擔當之法官及外務卿之名譽上に於ても深く所賀に御座候
右兩件結局の祝詞奉呈之ため如此御座候敬具

明治八年六月十五日

花房義質再拜

右大臣公閣下

尙以歐洲近況及當國之物情等は不斷公使を外務卿之報告にて御承知之事と存候別に不奉申上候以上

三九 三宮義胤書翰

岩倉具視宛

明治八年六月十六日

拜啓彌御機嫌克國家に御盡精可被爲在段敬賀仕候并に御簾中も御一同御無事の趣き過日龍公子の御狀に承拜承是亦拜賀仕候扱頃日來既に兩度書帖を拜呈し野老の身體の義に付出願仕置候何れも御落掌被爲下候事と奉存候青木周藏も時々野老に書を投し云く同人よりも外務省并に老公迄再三速に御沙汰可有之様申立置候得共百事御多忙なれば萬一遲延するも難計に付此邊は屢々殿下の御迫まり可申上旨申越候定る青木を言上の義も御承知被爲在候事と奉存候得は御繁用中甚以恐入候次第に御座候得共一日も速に御沙汰に相成候様御盡力被爲下候様伏願仕候實は野老も家内を取りし以來は當國に一家を維持し居候に付彼是轉國に付ては家材等賣拂仕末の都合も御座候る昔日の如く一笈を背負ひ天下を漫遊せし様にも難參何卒此邊御推考を被爲垂候様希願仕候
當地も近來上野着致し候以來は本邦の情實も大に明かに相成時々同人并

に中井弘等と内外之事情相語合候上野は案外生徒の世話も能致し一體の氣受宜敷御座候中井の輕舌奇風は昔日に異なる事なし
魯國の應接も頃日相伺ひサガレインを魯に與へ代りに他の屬島を日本に全く領せる様掛合濟みになりしと此節歐洲新聞紙に相見へ申候英人評して云彼のサガレイン島中には中々莫大の石炭あり日本人は是を知るや否萬一魯野心を狭み東洋エシア海中に兵を出さんと欲するには能き助けを得たりと云魯政府チペリヤ是支那の北方に當りて魯の所領なりの罪人を悉くサガレインに移し植民開拓に就業すると云へり歐洲の人氣も魯の他エシア海中に意を逞ましゆせんとするの邊には余程ぬかりなく氣を付居候○頃日佛宇兩國間に戰爭を發せる杯紛々の説御座候得共是は魯帝宇に至り同國の帝と靜謐を盟約せし以來は世上の説も大に穩の姿に相見申候亦た宇國は既に歐洲各國政府に觸を出し敢て佛國に對し間を生し戰を起す事なし是皆な一時無頼の黨無據の惡説を流布せしに依るなり向來は彌兩國の間平穩たる

云々布告書を出せり

「茲に或る新聞紙作者云く近來宇國より佛宇兩國の間は后来以前に反し平穩なるべしと唯此一枚の布告を信し世上悉く安心の思ひを成すなれとも我は甚た是を信せず如何と云にビスマルクのあるあり彌佛宇兩國間太平無事なるや否は今日敢て世人の知る處に非す五十年の後ビスマルク我が傳を書くに至りて諸事明瞭なるべしと云へり歴々の識者皆々然りと云へり英政府は彌魯佛宇の三國に反し君民共治の政體を堅くし太平無事を唱ふ故に近來は歴々の識者等議院中二三所々會合を起し英國今日の形勢にては更に兵力の助けを以て人民を保護するに不及陸兵は悉く解隊し隨て海軍も中ば廢止すべし他國間に隙を生ずる事あれば公平至當の論を以て曲直を分判すべし杯との説を主張せり是は今日出來る事には非るべしなれとも英は他日是の説に歸すべしと云へり右等は近來の新聞御參考の一助にもと聞見の儘申上候

龍公子も無事近來は大に學文も上達せり御放念々々々可被下候尙近日阿州の人元御邸に居りし森俊助病氣に付歸國致し候間其節何も同人より御聞取被爲下候様希上候余は后鴻に言上可仕候早々頓首謹言

六月十六日 青木の書帖備御覽候

三宮 義胤拜

岩倉老公殿下

過日來繪の新聞紙呈し候御落掌の事と拜察す

(参考) 青木周藏書翰「三宮義胤宛」 明治八年六月十六日

本月十八日之尊簡漸く一昨日落手田舎の旅行せし故なり彌御健適重疊々々

先日差出置候壹封は果る御落手被下候や不明者一々拙答する之暇に乏し後日に譲り置べし

老兄身上談は生よりも詳悉岩公の申入置候得共急に御指令有之候邊如何

? 實に百萬も御氣之毒に候得共期時日わけには些と参り難し要するに切迫自薦するに宜し請ふ度々投書催促すべし生より昨今重る岩公の縷々可申越覺悟に御座候家之借用等之關係は固より可然事と萬々推察罷在候得共實に時日を期して「如此すべし」とは御請合不相成候間此段不惡御照亮可被下候

桂太郎義拙官不明附之軍務不明に被任候由先日公信有之申候追而着府之

節何とか奇珍之新聞など持参候は、草々可報知奉存候

先は用事而已草々不二

周藏

三宮 老兄

細君の可然御致聲是祈

四〇 三條實美書翰「岩倉具視宛」

明治八年六月廿五日

梅天鬱陶之候
皇上

皇后御機嫌能臨御被爲在奉恐悅候貴兄益御清剛御起居可被爲在遙賀之至
存候御入湯御相應相成候哉尙御容體相伺度候廟堂上相替り候義無之諸官
勉勵奉職候條御安慮可給候二十日より地方會議も相始り木戸參議擔任勉
強先以居合も相付都合宜模様ニ御坐候稍安心仕候元老院も漸居合相付是
亦安心仕候事に候然處島津左府突然湯治之願書差出相成甚困却仕候得共
尊公も御湯治に付何れ御歸京之上三人協議之約も有之候事故尊公御歸京
迄猶豫之事申入置候得共頻に切迫し被相頼如何可仕哉と苦慮仕候事に候
大久保にも此度は願通一旦御聞届相成候方可然見込に承り候右之一條も
有之候旁尊公御歸京屈指御待申候事に候何卒期限通御歸り相成候様奉渴
望候先は御安否伺旁一筆愚札拜啓仕候餘期後信候草々拜具

六月廿五日

二伸 時下御自愛專祈候小生にも先以無異奉職罷在候條乍憚御休意可
給候大亂御推讀奉仰候

實美

巖倉右府公

親展

四一 三宮義胤書翰

〔岩倉具視宛〕 明治八年七月一日

拜啓彌以御無事御奉職被爲在候段敬賀仕候扱近頃當地之浮説に或は老公
御辭職被爲在候哉杯紛々安からざる風聞御座候如何之御趣意に候哉心痛
無此上次第野老も何分本邦の實情を承知せざる事に付善惡可否を言上仕
候事も難相叶遙察仕候に近來新參議^{板垣}出仕以后は元老議院の御建立就
るは議員の御採用に付内外御混雜不一方義と奉存候東京輦下には民撰議
院の黨盛に舌を鳴らして政府の間隙を伺ひ西には西郷桐野の一連腕をさ

岩倉具視關係文書第六 (明治八年七月)

三百四十一

すり英氣を含蓄し國家の急に臨ては一發するの勢ひあらん歟に見へ加るに政府の所置一に堅説に出るとも難云而て大藏の費多くして疲弊の極を盡し實に國家の大難事是より上なかるべからんと拜察仕候是れは野老近來新聞紙上に於日本近頃形勢を荒増したる處よりの推察に御座候萬一今日の實景野老の見外にありしなれば國民の幸是より上なかるべし老公此の際に當りて内外合集の御盡力は申上る迄もなき御刻苦拜察々々に不堪到底は終に干戈を振はずは萬古不易の大基礎を立つるに至らざらんと案勞仕候事斯かゝる御難事の中とも不顧過日以來は度々愚書を拜呈し野老か身體の事を出願せしは重罪此上なき事に御座候何卒幸ひ御仁恕を被爲垂候は、生涯の仕合に御座候野老も兼言上仕候通り今日突然歸國致し候迎も中々歐洲間に於尠か學び覺へし事を施こす機にも有之間敷更に東西の方向も空くして立ち難く却て他日國家に盡す障害となるへきは必然と愚考仕候得は幸ひ身は歐洲に居る事なれば如何様になりても今五年

七年の滯留の出來候策を求め一言半句一事一聞にても眞實の知識を得て他日國家に報するより外策なしと決心罷在候得は幸ひ青木公使の心切なる昇陞の策老公御辭職前に御取成し置被下候は、生涯の大幸に御座候唯野老の命脈は此一事に御座候伏す仰くらくは此上萬々老公の御盡力の下に野老か志しを空しくせざらん事を

「龍公子も當夏の休業中は或る法律師匠の家に御同居日々御勉強なり決り御懸念無之様致度學文は案の外に進み申候近來は更に金を遣ひ過るの遊ひに長する杯と云影も形ちも無御座御放念々々々々

「上野公使も案外たん白なる人に於生徒の事も能々世話を致し一同の受隨分宜敷弟は至る懇意に致し候付時々弟が宅に遊來日本の公開新聞を申聞し候

「三條若公も至る勉強に御座候近日の中森寺國之助の弟廣三郎と申者歸國仕候に付拜謁を乞萬事同人より當地の實情言上可仕候早々頓首謹言

七月一日

三宮義胤

岩倉老公殿下

四二 上野景範書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月十日

鹽田大丞の御依托之懇輸難有拜誦仕候高堂御揃益御清穆被爲在御座候由奉賀候御令息儀鹽田同伴御歸朝可有之事に御決定に相成候に付は萬事之都合御申越相成敬承仕候然るに右は三ノ宮氏并に原氏にも同様之御頼狀御遣相成候趣にて過日は三ノ宮氏態と來訪有之同氏之見込も篤と承り申候處三四ヶ月前迄は隨分放蕩度々過脇目も見兼候程之事折々有之候得共近來に至りては品行餘程相改學事至極之御勉強に有之只今に於て聊御掛念も無之候間此末暫御滯學相叶候様三ノ宮原の兩氏を閣下へ可申送旨に有之御同人は餘程之御英敏充分之才氣御備相成居候間此儘御歸朝相

成候も亦遺憾に存候儀無理とも難申候乍併御令息之御考には最早今日迄度々歸朝之儀御申越に付其御命令には決して御悖不相成との御見込に有之御從順之御志操實に感佩仕候鹽田は來月下旬には當府へ來着可仕候間猶同人と篤と相談も可仕候得共御懇書之御請旁寸楮如此御座候時下折角御保養被遊候様專祈仕候不備

七月十日

上野景範

岩倉具視殿

二白 三ノ宮氏も當分は蜂須賀氏と相離れ別居いたし居度々當館にも參り親しく相交り申候

四三 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月十四日

二伸 過日御内談申候島津意外好都合に相成議長拜命にも可相成模様

に御座候尙篤と相定候は、可申上候

御安全奉賀候今朝は御投書之處別段御答不仕失敬候恐懼之至に存候扱拜
顔を得候て御談申含み有之候土方の内願仕候岩谷内拜借金之儀尊慮如何
哉拜承仕度候何卒思召一寸御示被下度候仍乍略義此段申陳度如此候也

七月十四日

二伸 段々差支御出御理恐懼之至に存候東久柳原兩人之内御申聞之義
に候は、如何様にて今日退出掛參上仕候も宜存候御示可給候

實 美

岩 倉 殿

四四 青木周藏書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月十五日

追啓 北白川宮殿下御學資一條何分御答可被爲下日々御待申候
拜復 鹽田大丞に御附托被爲下候御親東難有拜受仕候先以老閣下時下益

御機嫌よく被爲在候御様子重疊奉恭賀候然は従前龍動に御留學有之候龍
殿御義此度御呼返可被爲成との御事に御座候處右は何等之原由に而斯く
殿敷被仰出候哉御同人御義は今以少壯之御方にも有之且少々之御失誤有
之候とも御教戒御加へ被爲成候上何卒御留學御差許被爲成度奉存候即今
御歸朝有之候義は爲公私決而御爲とは被存不申候固より此際御高案も可
有之候得共猶又御熟考被爲成度奉存候

政體變革之一條に付而は嗚々御配慮被爲成候御事と奉遠察候尤元老并官
撰議院之外參議諸卿及大審院等連立有之候義は全體之組立餘り御多端と
もに而は無御座候や時に大審院御設置被爲成候とも政治法律之科に明き
者は邦人中千萬稀少にも有之且所謂學者は實際之施行如何を顧省仕候者
鮮く候間立法行政之二權を如此判然御區別被爲成候義は第一御國之形勢
に適當如何と奉存候隨而第二には大審院之官員舊左院之人数居多候間此
舉は名實相稱候御組立とは被存不申候尤全體之御變革今以御半途に被爲

在候間 愚生一言を以其非を判候わけにゐは無御座候得共遠察之廉乍序拜啓仕候

先前達御聞置候三宮耕庵義頻りに當國に在勤之志願有之候歟に相見候處
明年に相成候得は當館一等書記官品川彌二郎義歸朝可仕候に付左候は、
同人之跡續として三宮義を三等或二等書記官に御任被爲成當館に在勤被
爲仰付間敷歟此段伺尊慮度奉存候萬一御不同意に不被爲在候は、別段御
答を戴候にも不及候間追々小生より公然外務卿へ伺申遣候節猶外務卿に伺
申遣候節は老
閣下の同時に此段
拜啓可仕奉存候千萬恐入候得共御一言寺島まで御申入可被爲遣奉願候耕
庵義は固より當國之言語不通候得共英語之識も有之且性質實着之者に有
之候間獨人之氣にも稱ひ一書記之任には屹度相當之者と奉存候此條内陳
先は右申上度其内時下御自重可被爲成爲國土人民奉祈候恐々頓首

八年七月十五日

ベルリンにて認之

青木周藏拜具

岩倉右大臣殿下

四五 三條實美書翰

「岩倉具視宛」 明治八年七月十五日

御安全奉賀候昨日御書面敬承仕候三業會社之義は可也治り相付可申先安
心之方に候島津一條は甚苦慮仕候は二ヶ條都合あしき義也左府被任候へ
は後藤は辭表差出候哉に相聞候左様相成候は院中に波及之憂現然一動
搖にも可相成實其邊懸念に付前以板垣にも内談仕居候處同人決る右様之
懸念は無之申候間安心致居候處果して右之情實甚困却仕候板垣に周旋致
させ居合相付候様心配中に御座候へは大審院も右大臣之兼任被廢候へは
元老院も兼任は不可然との議論も有之候
一御拜借邸之事は宮内卿へ篤と申置候早々如此候也

七月十九日

實美

岩倉殿

四六 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月十九日

今朝は參殿御面倒恐悚候然は本日條公と御内談之結果如何哉不堪懸念何分御勇決耳岐望致居候事に候海江田々只今如別紙申越候得共本日は爲質問外國人方へ行向候間理置候共尙此上にも遷延候得は實に不容易景況と可成行懸念罷在候先御模様伺旁内啓如是御座候也

七月十九日

岩倉殿

柳原前光

（別紙）

何分至急之方可然事に御座候

無據御相談申上度義有之今日何時頃參殿仕候る御都合宜しく候哉奉伺候也

七月十九日

海江田信義

柳原公開下

四七 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月二十日

海江田に面晤致し段々説諭仕置候就るは來廿二日には必ず拜任之御達相成度若右も遷延候得は必ず奈良原等と同道條公へ推參可仕趣に御座候右次第故目下鎮撫行届候得共萬一條公尙此上御躊躇相成候得は大破裂と可相成今朝同公御口狀に據ればよもや此上御遲疑も被成間敷存候得共智者も當局て迷ふは千古之確言に候得は尙深厚御忠告岐望候草々拜啓頓首

七月廿日

前光

右府公

侍史

四八 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月二十日

本日二時頃三條公より別書接收右は既に海江田面接後に有之候故而談事情及拜啓必々廿二日中に御運相成度申進置候處尙又唯今也^{四時}御再書拜授政府之議落着不致候に付海江田に御直會之思召に付御相談に御座候愚考には廿二日或は廿三日中に御運ならば條公御苦勞に不及下官が説諭にて可足萬一無際限儀に候得は政府内情先方へ發露致居候儀に候得は寸刻も永日之思にて可被待居候間御無詮と可相成只此上は治亂共條公之御一心に有可之邊にて不憚忌諱拜復仕置候に模様此ては今朝條公之御相談も不相調彌御躊躇之儀と不堪歎息一昨冬之覆轍既に顯然と存候右早速内々及拜啓候也

七月廿日

柳原前光

岩倉殿

侍史

四九 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月廿一日

炎威酷烈之際貴體御切養奉禱候然るに左大臣へ議長兼任御達し之日時御確定如何哉と昨日條公へ尙又及内問候處雀亂症にて病臥に付以宮内大輔奏上之處條公快氣之上御取極可相成御積りの由同公が御答到來候既に今朝は海江田同公へ推參押る病牀にて拜謁御確定之日時相伺候處是又同様之御答に有之候由に候内田政風も拙宅に來り其所説は怒を變して廟謨之拙を冷笑仕居候實に切迫之際に同公御病臥甚以不幸之儀と存候得共無致方去迎尙此末自然左府公被憤怒候は今早大破裂と相成實以配意候間海江田へも其趣申聞從下官唯今左公へ送書條公病臥に付遷延之譯を托て纏

縫仕置候手續爲御心得及拜啓候也

七月廿一日

前光

巖倉公

五〇 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月廿四日

島津一件段々延引痛心仕候得共多分明日は宜と存候間夫迄は 御待可給候實は右一條木戸にも厚心配致させ自然被仰付候ても紛雜不致丈之防禦は相付可申と存候此一舉政府中に頗る關係を相持候間稍元老院のみに無之政府中にも甚波及可仕候内輪之居合相付不申節は不容易紛亂目下の勢に御座候條此處は厚御考味願度候

七月廿四日

實美

巖公

五一 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月廿五日

明朝は八字參内仕島津一條言上内閣議論之次第も詳に申上猶 叡慮之處も奉伺候含に御座候

七月廿五日

實美

岩公

今朝參内島津一件縷々申上候處何分兩端御懸念も被爲有御勘考被申御事に付今日は退願仕候

七月廿五日

實美

岩 公

五二 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月廿九日

御安全奉賀候然ハ左府兼任一條段々延引甚不都合とも考候得共無據次第も有之遅々仕候内實木戸大久保にも非常に心配彼是談論仕居候に付今日には多分決着可仕候と存候猶今日も大久保方に木戸も唯今々會し候筈に付模様分り次第早速尊公にも申上候含に御座候此段得貴意度如此候也

七月廿九日

實 美

岩 倉 殿

五三 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月三十日

柳原相招縷々申聞候處同人考に左府の何等之義も相通し不置突然右之御

沙汰相成萬一不都合之御答に亦も被申上候亦ハ甚不安凡是迄之手順も有之候に付實美ハ別紙之如き書面を柳原迄相達し粗先方に亦も心得居參内相成候方可然考に御座候然ハ今日左大臣被召候義は先日御内命之末猶御勘考之御次第も被爲在御沙汰被爲在候御都合に付此旨内々御含迄に申入置候云々

實 美

柳 原 殿

右柳原之考も尤に存候猶御相談仕候御賢慮御示願申度候早々不具

七月卅日

實 美

岩 倉 殿

五四 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月三十一日

今朝九字左大臣 皇居に被召云々御沙汰被爲有候處兩條共無異議御請相成申候出勤之義病體に付連日は難相叶其邊は御容赦願度との事に候今日も正院に出候筈ながら今日迄は直に退出と拙者へ相頼まれ退散相成候此段不取敢言上仕候

七月卅一日

實美

岩公

五五 柳原前光書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年七月三十一日

益御多祥慶賀候然は唯今海江田入來にて昨夜御用召にて今朝左府 皇居へ被出尤禮服用等之儀は無之間議長兼任之御達は無之事と覺悟出仕相成候由愚案には多分今日は直に御請出仕は不被致事と推察候右御舍迄内

啓候也

七月卅一日

前光

岩倉殿

五六 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年八月二日

御安全奉賀候然は左府も今日參朝に相成申候仍而尊公御保養御願之義も前以左府に御談之上御差出し之方可然奉存候仍此段内々申入度如此候也

八月二日

實美

岩倉殿

五七 三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治八年八月十五日

岩倉具視關係文書第六（明治八年八月）

三百五十九

大藏省上申華士族平民家祿典祿金給に改正云々之件は一般之關係之重件に有之候得は御病中に候得とも御廻し申入候間御熟覽之上御檢印有之度候尤差急き儀に候得は早々御答議被下度候也

八月十五日

右大臣殿

實美

五八 岩倉具視書翰

〔佐々木高行宛〕 明治八年八月三十日

前略兼て御内話有之候土屋某より山地北村云々の次第山縣出會内談候處情實至極尤の事にて更に異議有之候筋無之先日來出會候はゞ可申入と存ながら掛違候尙出會の砌可申入候

一高知縣令云々小南五郎右衛門云々貴卿齋藤氏より御内談の末條公小生にも心配罷在候へ共未不相運候就ては乍御苦勞内務卿伊藤御出會にて

始終巨細御咄し有之度候

一山田氏一件に付ては御面會の砌申承度次第御座候

右早々如此候也

八月三十日

具視

佐々木高行殿

五九 柳原前光書翰

〔岩倉具視宛〕 明治八年九月三日

一前途目的御趣意書書取り呈覽候尤議案に編成し會議に御附與被遊候得は尙熟考仕候得共本日發起人等へ御内示は至急之御用故簡略に致置候事

一本日午後四字發起人及徳大寺東久世御招請に付參殿被命致承知候

右大略及拜啓候尙委曲は後刻拜謁可奉言上候

九月三日

柳原前光

右大臣殿下

侍曹

六〇 寺島宗則書翰〔岩倉具定宛〕 明治八年九月四日

拜誦陳者御到來之別紙御差越相成三宮採用之義に付縷々高示之段拜承致候然る處右は過刻も御面晤に盡し候通即今同公使館にも役員相滿居候に付追々又々考方も可有之候得共何分差向採用候都合に難相運候條御領容被降度存候因別紙返進致候右貴報迄如此御座候不悉

九月四日

寺島宗則

岩倉具定殿

六一 岩倉具視書翰〔三宮義胤宛〕 明治八年九月五日

五月四日六月十六日七月一日等書翰各令披見候愈安全御留學珍重に存候陳者足下官途拜命懇願之義に付毎々巨細御申越都て致承知候兼々依頼之義承知に付歸朝後寺島其外外務官にも段々申談置候得共何分定員有之至急には難被行又派出公使之望も有之一面會も無之仁をして押付登庸之義申談候譯にも難至候に付欠員有之候節双方懸合返答可致と之答有之今以埒明不申甚氣毒之次第に存候青木書狀も御廻し一見候同人小生へも直々來書獨公使館へ登庸之義申越候旁寺島へも得と申置候得共同様之次第に有之候然る所此度青木來年に至り候は、品川彌次郎歸朝に付右跡繼足下登庸之義内談有之付早速具定を以寺島へ及示談候所語學之違も有之如何可有之哉尙勘考致置との事にて判然引受も無之様子是も尤と存候乍去青木見込之筋申立採用致度段申出に相成は、多分出來可申哉と存候

猶青木へ精々懇談可然存候青木方へも巨細申遣置候

一具經歸朝之義彼是遺憾に御考も可有之哉と存候得共何分數年に經り且見込之筋も有之此度は是非共歸國申付候必ず鹽田大丞同船歸國可致様宜及依頼候巨細は此度本野書記官歸英に付委曲申置候間別段不及陳述候

一魯國應接樺太事件云々歐洲風船窮理云々發明一奇之服を製し一身水中自由往來窮理云々新聞二紙添へらるる歐國一般之形勢其外種々實地之模様毎々被申越心得に相成深忝存候尙此上便宜之節追申越有之度候
一内地之形勢新聞紙上にて推察一方苦慮候趣且推考之次第何も致承知候併遠隔之義御推量過慮に渡り候義不少と存候何分政體改革早々之事に付少々物議は有之候得共大なる事も有之間敷存候拙者義退職云々段々配慮之趣忝存候得共如何之行違にや不審に存候右は宿痾頭痛再發頗る困却去々月中熱海湯治罷在候得共不相應に付引取今以不工合籠居致

居候右等之義間違之事と存候乍去此末容體如何可相成哉其邊は難計存候

一蜂須賀氏へ別段書狀不差出此度具經歸朝申付候次第は鹽田渡海之節一書を呈し置候長々不一方御世話に相成候段厚御申入有之度候原保太郎へも同斷宜敷傳聲有之度候
右條々及御答度如此候也

九月五日

具 視

三宮 耕庵 殿

六二 岩倉具視書翰

青木周藏宛 明治八年九月五日

五月廿日六月二日三條兩名七月十五日等書翰令披見候先以御安全奉職欣然之至り候然北白川宮學資之儀に付縷々申越候趣三條小生にも段々心配致